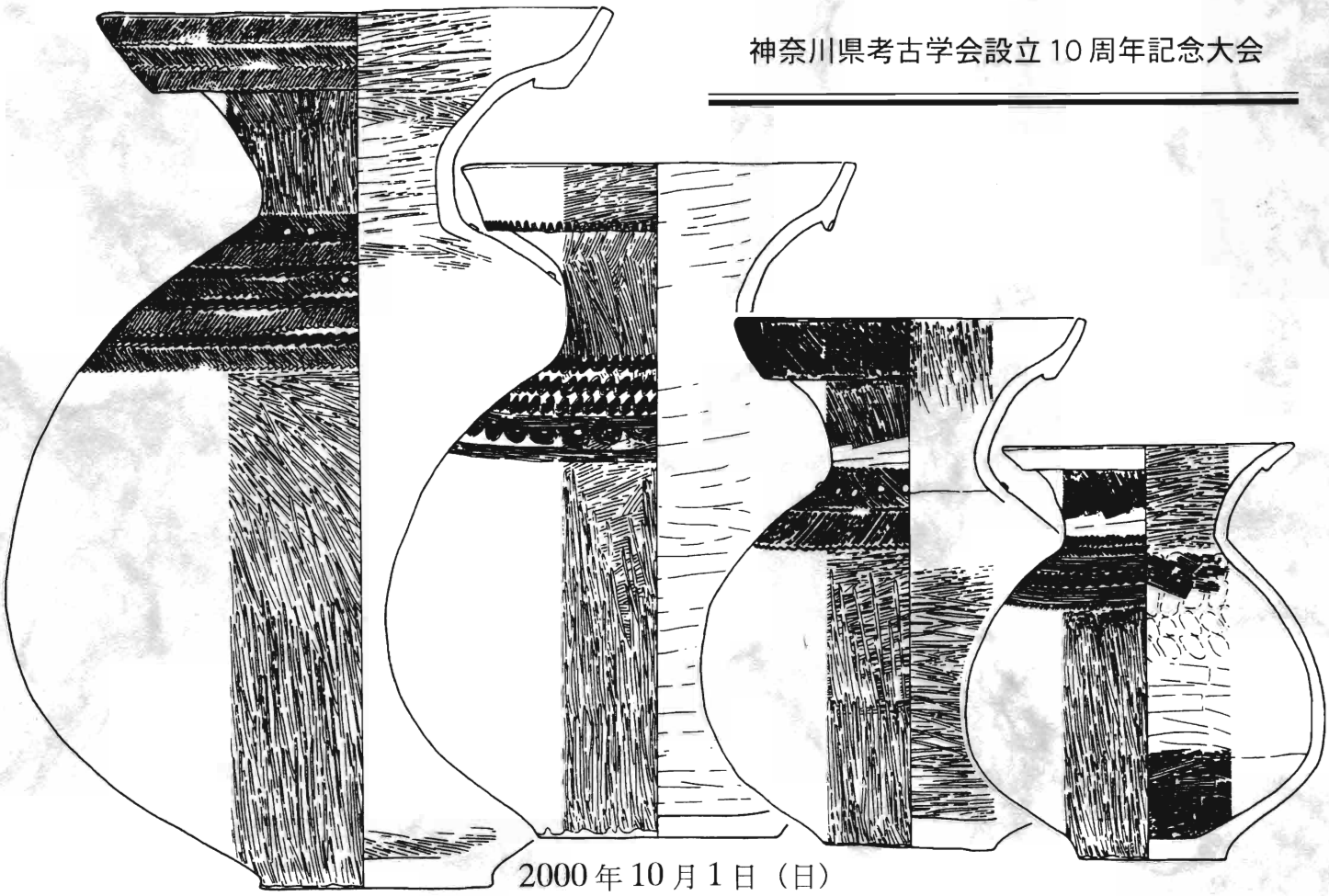
第24回

神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨

神奈川県考古学会設立10周年記念大会



2000年10月1日（日）

鶴見大学会館

主　催　神奈川県考古学会
　　鶴　見　大　学
後　援　神奈川県教育委員会
　　横浜市教育委員会

開　催　日　程

２０００年１０月１日（日）
鶴見大学会館　メインホール

開会挨拶

9：00～9：15　神奈川県考古学会　会長　寺田　兼方
鶴　見　大　学　教授　大三輪龍彦

研究発表

9：15～9：55　縄文時代初頭の古環境と河川利用－藤沢市 No.106 遺跡の調査から－
桜井　準也

事例報告

9：55～10：20	縄文時代　小田原市	羽根尾貝塚と泥炭層遺跡	舘　弘子
10：20～10：45	縄文時代　綾瀬市	道場窪遺跡	小滝　勉
10：45～11：10	弥生時代　逗子市	地蔵山遺跡群	土屋　浩美
11：10～11：35	弥生時代　寒川町	高田遺跡	中村喜代重
11：35～12：00	弥生時代　平塚市	真田・北金目遺跡群	上原　正人

昼　食

12：00～13：00

研究発表

13：00～13：50　大和市上草柳第３地点南遺跡－先土器時代における人と火の関わり－
ビデオ『神奈川県大和市上草柳第３地点南遺跡の調査』の上映　織笠　昭・會田　信行

記念講演

13：50～14：50　神奈川県下貝塚調査の思い出
慶應義塾大学　名誉教授　江坂　輝彌

休　憩

13：50～14：00

事例報告

15：00～15：25	古墳時代　厚木市	登山古墳群	平本　元一
15：25～15：50	古　代　秦野市	西大竹尾尻遺跡群	霜出　俊浩
15：50～16：15	古　代　茅ヶ崎市	香川・下寺尾遺跡群下寺尾地区	中村　哲也
16：15～16：40	中　世　鎌倉市	北条小町邸跡	森　孝子
16：40～17：05	近　世　箱根町	大芝遺跡	谷口　肇

閉会挨拶

17：05　神奈川県考古学会　副会長　伊東　秀吉

閉会

17：20

図書交換会
9：30～16：00　第三会議室

目　　次

●○○○　研究発表　○○○●

縄文時代初頭の古環境と河川利用　－藤沢市 No.106 遺跡の調査から－
桜井　準也・増渕　和夫・松葉　礼子　1

大 和 市　上草柳第３地点南遺跡　－先土器時代における人と火の関わり－
織笠　昭・會田　信行・上小澤桂一　9

○●○○　記念講演　○○●○

神奈川県下の貝塚調査の思い出　江坂　輝彌　17

○○●○　事例報告　○●○○

小田原市　羽根尾貝塚と泥炭層遺跡　戸田　哲也・舘　弘子　22

綾 瀬 市　道場窪遺跡　矢島　國雄・小滝　勉　29

逗 子 市　地蔵山遺跡群　土屋　浩美　33

寒 川 町　高田遺跡　中村喜代重　39

平 塚 市　真田・北金目遺跡群　上原　正人・川端　清倫　49

厚 木 市　登山古墳群　平本　元一　55

秦 野 市　西大竹尾尻遺跡群　霜出　俊浩・須田　弥生　61

茅ヶ崎市　香川・下寺尾遺跡群下寺尾地区　中村哲也　65

鎌 倉 市　北条小町邸跡　森　孝子　71

箱 根 町　大芝遺跡　伊藤　潤・谷口　肇　77

○○○●　誌上報告　●○○○

逗子市・葉山町　長柄・桜山第１・２号墳　柏木　善治　83

川　崎　市　千年伊勢山台遺跡　河合　英夫　87
武蔵国橘樹郡衙推定地の確認調査

縄文時代初頭の古環境と河川利用

—藤沢市№106遺跡を中心に—

桜井 準也・増渕 和夫・松葉 礼子

所 在 地　藤沢市今田24-2、今田字丸山31

調査機関　藤沢市№106遺跡発掘調査団

調査担当　田代郁夫・松山敬一朗

調査目的　相模鉄道いずみの線および横浜市高速鉄道1号線建設に伴う事前調査

調査期間　1997年6月2日～11月6日

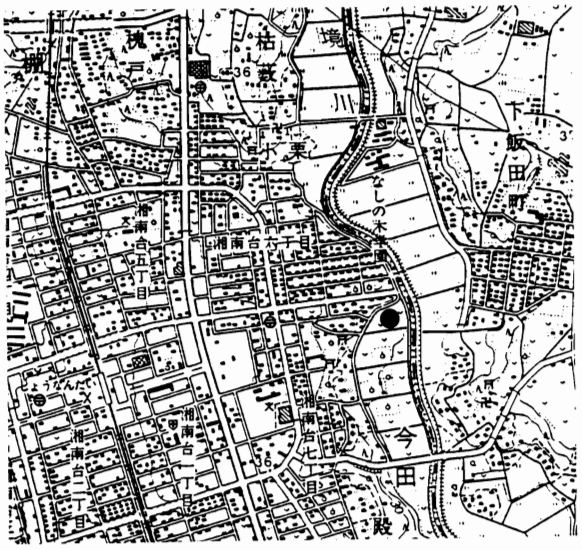
調査面積　6㎡（P21・P24・P1410）、80㎡（P22）、144㎡（P1411）、146㎡（P1412）

1　遺跡の立地

本遺跡は神奈川県の中央部の藤沢市北東部湘南台・今田地区に位置する（第1図）。本遺跡はほぼ南北に流れる境川の低地部分にあたり、本遺跡はかつて境川が西側に大きく蛇行していた部分にあたる。本遺跡の層序は全体で約2mの層厚で下部が河川堆積物、上部が離水後の堆積土層、最上部が盛土である。このうち、上部層は台地上に隣接する藤沢市№419遺跡の基本層序の表土～Ⅲａ層上部（縄文時代中期頃）にかけての土層に対比できる。これに対し、下部層は上部が水気の多い粘土層やシルト層、下部が砂層と粘土層の互層、その下が礫層（相模野礫層）となっており、上部と下部の境に不整合がみられる。

2　調査経緯

本遺跡の発掘調査は、相模鉄道いずみ野線および横浜市高速鉄道1号線建設工事に伴う事前調査であり、両路線のピア（橋脚）部分が調査対象となった。藤沢市教育委員会によって試掘調査が行われ、P21調査区で縄文時代の加工木材、P22調査区で古墳時代の溝状遺構や縄文時代の木材が検出されたため本調査を行うこととなった。調査は平成9年（1997）6月2日から11月6日にかけて、P22・P1411・P1412調査区の順に実施した。

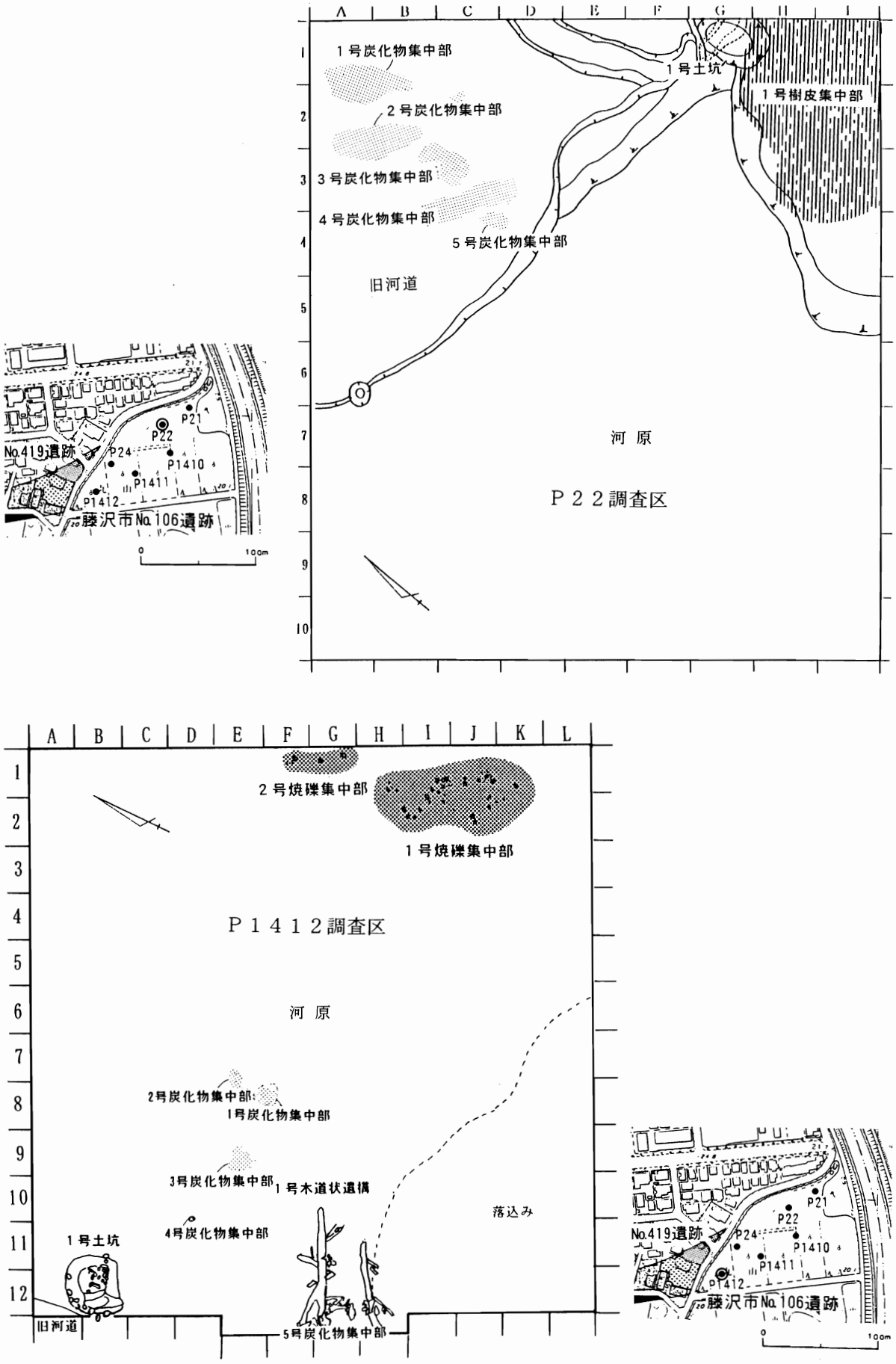


第1図　遺跡位置図［1:25,000］

3　調査概要

P22調査区（第2図）

本調査区では、調査区北側に旧河道が検出された。遺構としては調査区南東隅で円形の土坑や樹皮集中部、旧河道内で炭化物集中部が検出された。土坑は旧河道と河原の境界で検出され、径約90cmを測り、覆土中から板状木片が6点出土した。樹皮集中部は大きさが揃った針葉樹の樹皮100点程度が重なって出土し、下部に不整楕円形の浅い窪みが存在する。本樹皮集中は隣接する土坑と一体の遺構と考えられ、土坑から出土した板状木片から剥がされた樹皮を保存した場所と推定される。炭化物集中部は旧河道部分で5ヵ所検出され、集中部内および周辺にクルミや種子がまとまって出土している。出土遺物は旧河道部分に集中しており、建築材・加工木材・炭化材が出土している。



第2図　遺構検出状況（1mグリッド）

P1411 調査区

本調査区では、不整合面より下の砂層・粘土層・砂礫層・粘質土層で構成される斜交堆積層が発達しており、砂層は礫層（相模野礫層）上面で北西－南東方向に堤状に堆積している。明確な遺構は存在しないが比較的小規模の炭化物集中部22カ所や樹皮集中部が8カ所検出された。出土遺物として縄文土器片・柱材・加工木材・炭化材が出土している。

P1412 調査区（第2図）

本調査区では、西端で旧河道が検出され、南側に浅い落込みが存在し、木材が集中して出土した。また、砂層が礫層（相模野礫層）上面でほぼ南北方向に堤状に堆積している。遺構としては、土坑1基、木道状遺構1基、焼礫集中部2カ所、炭化物集中部5カ所が検出された。土坑は調査区西側で旧河道に接して検出されており、長径1.2m、確認面からの深さは約0.25mを測る。底部には10～15cm程度の河原礫が20点程が敷かれており、南西隅には伏流水の吹出口が存在する。附属付設と考えられるものとして、長さ20.0cmの直立した木材（トネリコ属）や外側に配置された10～20cm程度の礫があり、木材や堅果類等の晒し場であった可能性がある。木道状遺構は調査区南西部で検出され、長さ2.4m及び1.9mの大形木材（トネリコ属）が旧河道の方向に延びており、北側の木材の下に厚板状木材が挟み込んであった。西側の台地（藤沢市№419遺跡）へ渡る木道である可能性がある。焼礫集中部は調査区東側で2ヵ所検出された。このうち、1号焼礫集中部の中央部に砂が焼けた燃焼面が存在した（神奈川県立七里ガ浜高校、上本進二氏の御教示による）。縄文土器片1点、焼礫32点が出土し、焼礫はすべて破砕・赤化している。河原で火を焚き調理等の目的で礫を使用したものと推定される。なお、出土遺物はすべて不整合面より下の層に包含されている。

4　出土遺物

縄文土器片、焼礫、炭化材、木材（建築材や加工木材を含む）、オニグルミや種子、甲虫類が出土している。縄文土器片はP1411・P1412調査区で出土しており、早期撚糸文期の土器である（第8図）。建築材はP22・P1411調査区で出土している。P22調査区の資料は長さ55cmの割材で表面に整形加工が認められ、片側に径10cm程度の窪みを有する。樹種はモミ属である。P1411調査区の資料は柱材で長さ39cmの割材である。下端部は磨製石斧等で切断されている可能性があり、表面は工具によって面的に削られている。樹種はニレ属である。加工木材には表面に磨製石斧の刃部による浅い加工の痕跡が認められる資料、断面長方形で側面等を面的に削った痕跡がみられる資料、板状木材を短冊形に加工したと思われる資料がある。樹種はトウヒ属、カラマツ属、マツ属単維管束亜属、ヤマグワなどである。P21調査区から出土した加工木材は長さ175cmで内側に石斧によると思われる加工痕が複数認められる。樹種はマツ属単維管束亜属である。炭化材には大形板状で表面が炭化している資料、丸木で先端が炭化している資料、小形破砕資料に分類できる。出土木材には流木と思われる資料が少なく、根材や枝はほとんど出土していない点が特徴的である。オニグルミはすべての調査区で出土しており、人為的な加工痕が認められる資料が含まれる。

5　古環境の復原

（1）遺跡の年代

出土木材の放射性炭素年代測定を行った結果、補正値で礫層中の流木の年代が約16,000年前、砂層中の木材の年代が約10,200年前、約13,500年前、約16,000年前、P1412調査区土坑内の木材及び1号焼礫集中部内の炭化物の年代がそれぞれ約11,600年前、約9,200年前という結果が得られた。

礫層内の木材が洗い出され年代にバラツキが生じたことを考慮すると、本遺跡の年代は12,000～9,000年前頃（縄文時代草創期～早期初頭）と推定される。

（2）大型植物化石・樹種・花粉・珪藻からみた遺跡の古環境

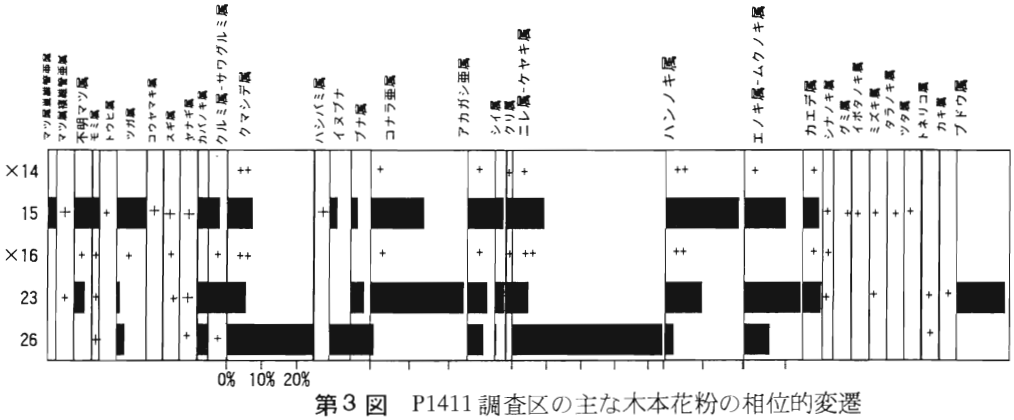
大型植物化石は、P22調査区でオニグルミ、コナラ、コナラ属コナラ亜属、クワ属、キハダ、ミツバウツギ、クマヤナギ属、ハクウンボクなど、P1411調査区でオニグルミ、ミツバウツギ、ハクウンボク、P1412調査区でオニグルミ、ミツバウツギなどが出土した。食用の可能がある資料として、オニグルミ、ミズナラなどのコナラ亜属、クワ属、サクラ属サクラ節、ヤマブドウ、ブドウ属、ミズキ、ノブドウなどがある。木材の樹種同定の結果、針葉樹5種、広葉樹17種の計22種が確認された。具体的には、トウヒ属（18.8%）、マツ属単維管束亜属（14.3%）、カラマツ属（11.0%）といった温帯性針葉樹とコナラ属コナラ節（8.2%）、トネリコ属（10.6%）、ヤマグワ（6.9%）、ハンノキ属ハンノキ節（4.1%）などの落葉広葉樹が確認された（第1表）。この分析結果から落葉広葉樹の樹種に多少の差異はあるものの、晩氷期の後期に相当する植生が想定できる。最終氷期最盛期から後氷期にかけての時期の関東地方の環境は、モミ属・ツガ属・マツ属・トウヒ属といった温帯性針葉樹が優占する植生から、約13,000年前に落葉広葉樹であるコナラ亜属が増加を開始し、その後約10,000年前に針葉樹が急激な衰退しコナラ亜属を主にクマシデ属・ブナ属・クリ属などの落葉広葉樹が優占する植生へと変化する。なお、加工木材と自然木の間に樹種の明瞭な差異はみられない。花粉分析の結果、P1411調査区（第3・4図）では、花粉化石分帯は下部帯と上部帯に区分され、下部帯はニレ属－ケヤキ属、クマシデ属を主とする落葉広葉樹林にモミ属、ツガ属などの針葉樹が混じる森林密度の高い古植生が推定され、上部帯ではコナラ亜属を主とする落葉広葉樹林に、マツ属単維管亜属、マツ属複維管亜属、モミ属、トウヒ属、コウヤマキ属などの針葉樹が混じり、開けた草地やハンノキ属湿地林もみられたと推定された。P1412調査区（第5・6図）では、台地の斜面にはコナラ亜属を主とする落葉広葉樹林が針葉樹を交えて分布し、低地にはハンノキ属湿地林やニレ属－ケヤキ属、クルミ－サワグルミ属からなる河辺林もみられたと推定された。これらの分析結果は、晩氷期の古植生と推定される。珪藻分析の結果、P1412調査区（第7図）では上部が止水性や陸生珪藻が目立つ半乾湿地の環境が推定され、下部では閉鎖的な池沼環境が推定された。また、南端部は一時的冠水し、その後乾燥化する環境が推定された。また、土坑では広布性種が最優占し、止水性種や流水性種や沼沢湿地性種とともに、流水性種や陸性珪藻が随伴優占することから、堆積環境は流れ込みのある淡水開放的沼沢湿地環境と推定された。

第1表　出土木材樹種同定結果

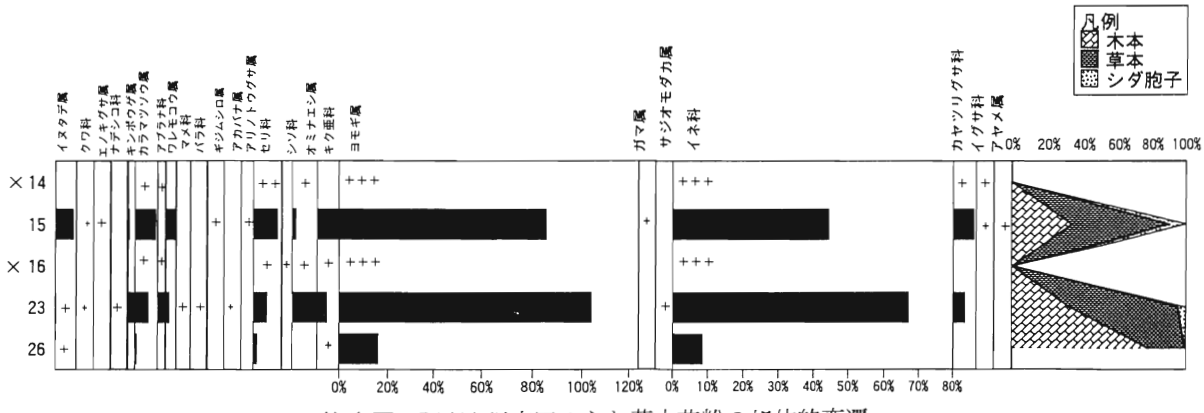
樹種	P22	P1411	P1412	P21	総計	
モミ属	5	13	2		20	8.2%
カラマツ属	7	16	4		27	11.0%
トウヒ属	13	23	10		46	18.8%
マツ属単維管束亜属	10	20	4	1	35	14.3%
ツガ属		2			2	0.8%
オニグルミ			2		2	0.8%
ヤナギ属		1			1	0.4%
ハンノキ属ハンノキ節	2	1	7		10	4.1%
クマシデ属イヌシデ節			4		4	1.6%
アサダ			3		3	1.2%
コナラ属コナラ節		11	9		20	8.2%
ニレ属	1	2			3	0.8%
ヤマグワ	2	2	13		17	6.9%
ウツギ		2			2	0.8%
サクラ属	1		2		3	1.2%
ナシ亜科			1		1	0.4%
キハダ			2		2	0.8%
カエデ属			1		1	0.4%
グミ属		1			1	0.4%
トネリコ属		6	20		26	10.6%
トネリコ属　根材			1		1	0.4%
イボタノキ属			1		1	0.4%
その他　樹種不明	4	4	9		17	6.9%
総計	45	104	95	1	245	

（3）古環境の変遷

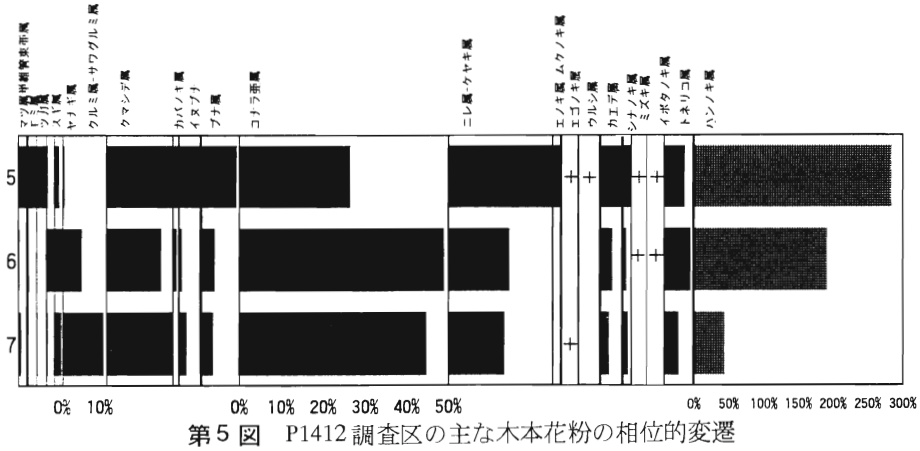
① P1412期（基底礫層と不整合とに挟まれた堆積物の堆積期：放射性炭素絶対年代約11,000年前前後）



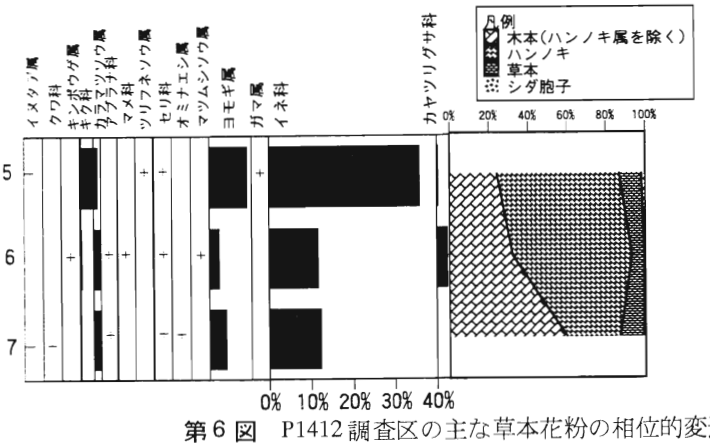
第3図　P1411 調査区の主な木本花粉の相位的変遷



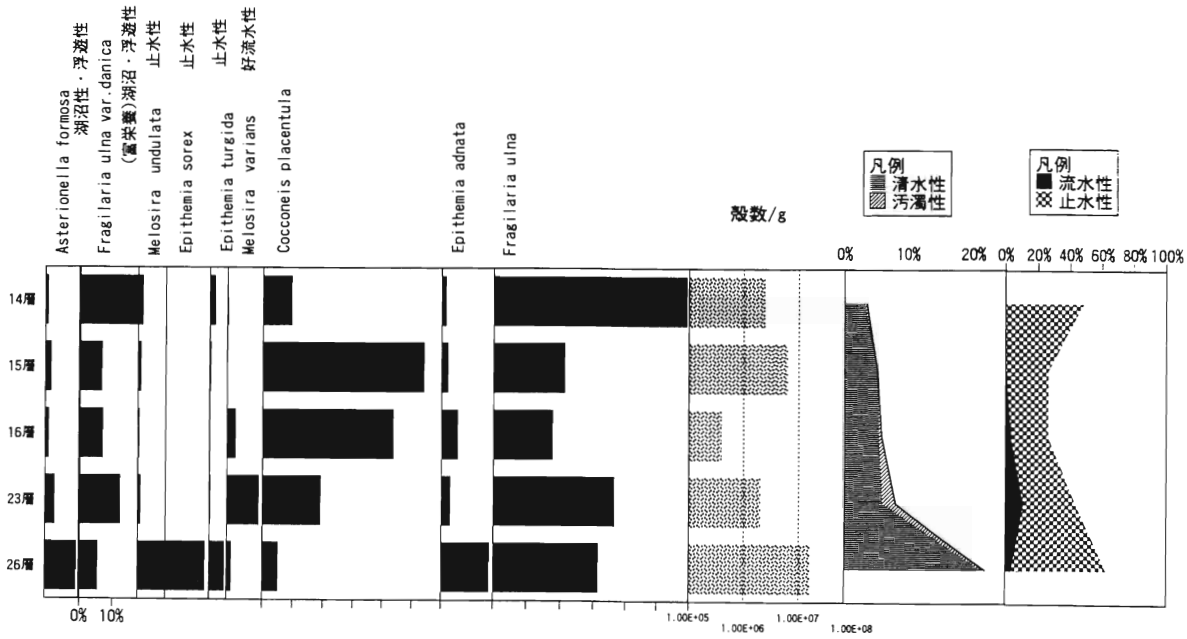
第4図　P1411 調査区の主な草本花粉の相位的変遷



第5図　P1412 調査区の主な木本花粉の相位的変遷



第6図　P1412 調査区の主な草本花粉の相位的変遷



第7図　P1412調査区の主な珪藻化石の層位的変遷

P1412調査区においては、北西面中央部に礫層と粘土層からなる自然堤防状の高まりが存在し、その東側の凹地に閉鎖的池沼環境＝後背湿地が形成され、洪水時に運搬された細粒物によって、凹地の埋積が進み、河道は西から東にシフトしつつ、当地点の微起伏は平坦化されたと思われる。古植生は、台地や斜面にはコナラ亜属を主とする落葉広葉樹が針葉樹を交えて分布し、低地にはハンノキ属湿地林やニレ属－ケヤキ属、クルミ属－サワグルミ属などからなる河辺林もみられたと推定される。

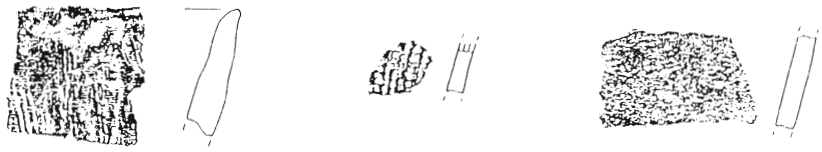
② P1411期（基底礫層と不整合とに挟まれた堆積物の堆積期：放射性炭素絶対年代約11000年前以降）

P1411調査区では、斜向する礫層が発達することや砂列から西南西にシフトしつつ、北北西から南南東に向かう流向が推定される。一つの仮説として、P1412期にその西方を流下していた古境川は後背湿地を埋積しながら、河道を東にシフトさせ、P1411調査区からその東側に河道が移動した。その後、河道は再びP1411調査区の西側（P1412調査区とP1411調査区の間）に移動し、放棄された旧河道に湖沼＝三日月湖が形成された。古植生は、当初、ニレ属－ケヤキ属、クマシデ属を主とする落葉広葉樹林に、モミ属、ツガ属などの針葉樹が混じる森林密度の高いものであったが、コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林に、マツ属単維管束亜属、マツ属複維管束亜属、モミ属、トウヒ属、コウヤマキ属などの針葉樹が混じり、開けた草地やハンノキ属湿地林もみられる植生へと変化したと推定される。落葉広葉樹が優占するなかで、僅かであるが照葉樹林の成立がみられたと思われる。ただし、上記の推定は、現時点ではP1412調査区とP1411調査区間の層序関係が不明確であることから、仮説の域を出るものではないが、今後の調査を行う上での指針とはなりうると思われる。

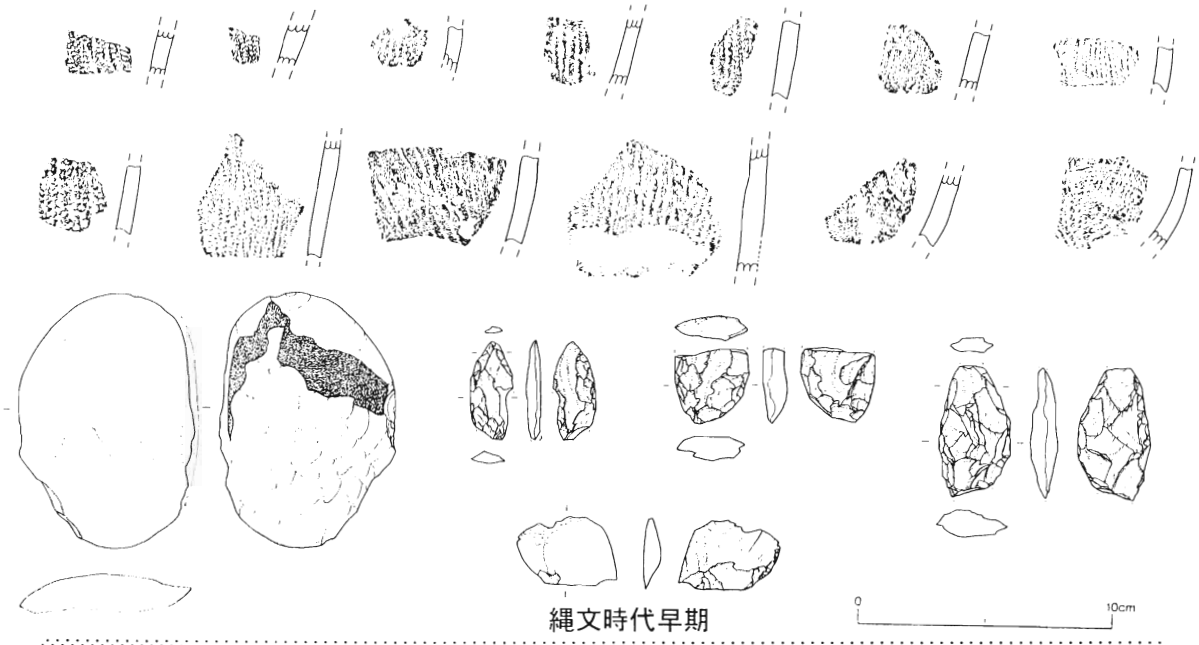
③ 完新世に入り、P1412調査区とP1411調査区は直接的に河川の影響を受けない場となったが、P24調査区には沼沢湿地が残された。

6　境川低地における縄文時代初頭の活動

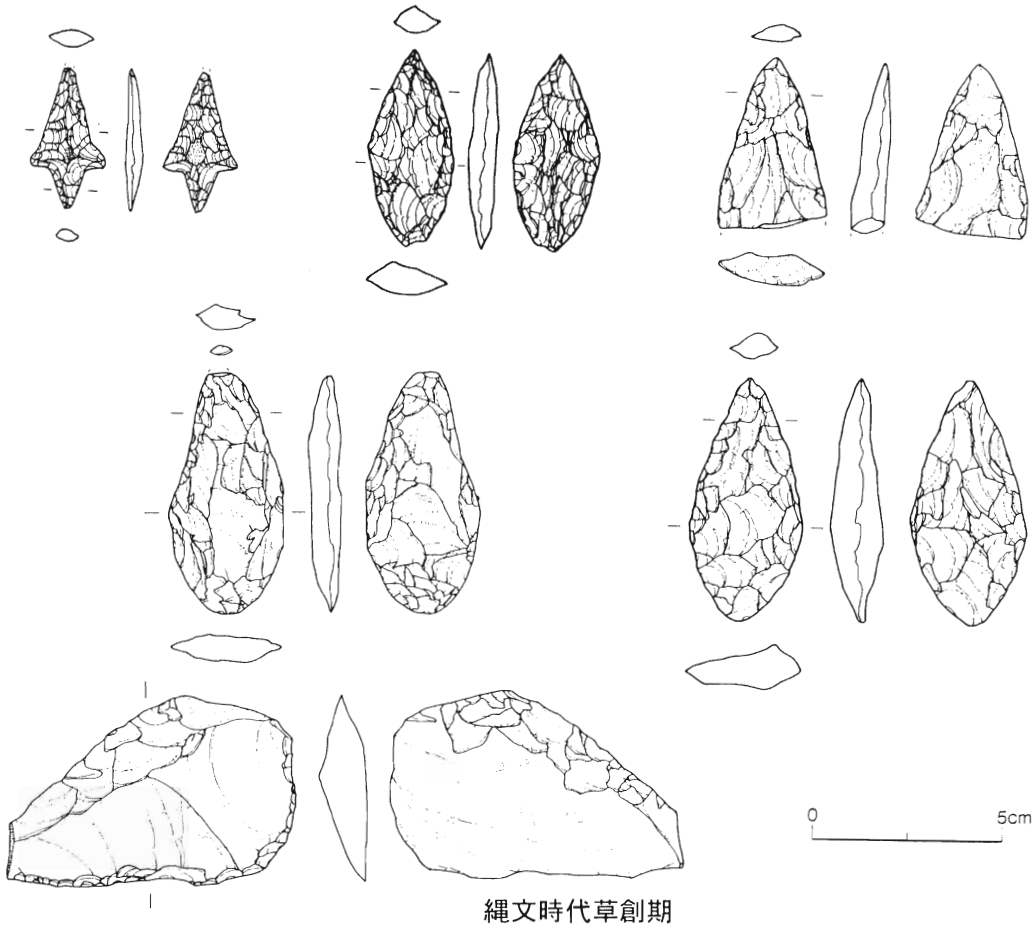
今回の発掘調査は遺跡のごく一部の調査のため不明な点が多いが、今回の調査成果から河川低地における縄文時代初頭（草創期～早期初頭）の人々の活動の一端を垣間みることができた。ま



第8図　藤沢市 No.106 遺跡出土遺物



縄文時代早期



縄文時代草創期

第9図　藤沢市 No.419 遺跡出土遺物

ず、遺構として土坑、木道状遺構、焼礫集中部などが検出されたが、木道状遺構は旧河道を越えて台地上の遺跡（藤沢市№419遺跡）へ渡るための施設である可能性がある。そして、河原には木材や堅果類の水晒しのための土坑や樹皮を剥した樹皮集中部が点在し、焼礫集中部は、当時の人々が河原で火を焚き、礫を焼いて使用して調理等を行っていた痕跡と考えられる。また、増水時以外は沼地となっていた場所は木材や炭化材等の廃棄場所であるだけでなく、木材の水漬け・保管や加工作業等を行っていた可能性もあるが、今回の調査範囲ではその実態が判明するに至っていない。このように、発掘調査によって縄文時代初頭の人々が河川を単に狩猟や漁撈活動の場としてしていただけでなく、様々な活動を行うの場として利用していたことが判明したが、遺構の分布は散漫であり活動も恒常的なものではなかったようである。関東地方でこの時期の低地遺跡で古環境の復原を試みている遺跡として、東京都練馬区尾崎遺跡（練馬区遺跡調査会・練馬区教育委員会 1982）や中野区松が丘遺跡（中野区教育委員会・中野区松が丘遺跡調査会 1989）があげられるが、神奈川県内では本遺跡が初めての事例であり、南関東地方で最終氷期から完新世にかけての環境や当時の生活を知る上で貴重な資料である。

次に、注目されるのは本遺跡西側に隣接する台地上に位置する藤沢市№419遺跡（藤沢市№419遺跡発掘調査団 1997・99）との関係である。藤沢市№419遺跡では旧石器時代から近代に至る複数の時期の遺構や遺物が検出されているが、本遺跡と同時期の資料としては、早期（撚糸文期）の焼土ピット、不整形土坑、炭化材集中などが検出され、縄文土器、尖頭器、削器などの石器群や多量の礫が出土し、草創期の石器群も検出されている（第9図）。藤沢市№419遺跡は本遺跡の西側に隣接する相模野台地縁辺部に立地するが、細長い舌状の台地の斜面に位置しており、当初は狩猟活動や漁撈活動を行う際のキャンプサイト的色彩の強い遺跡であると想定された。しかし、本遺跡と同時期の土器群が出土しており、両遺跡の間に木道状の施設が存在した可能性があることから、台地上の遺跡である藤沢市№419遺跡と低地遺跡である藤沢市№106遺跡が同一集団によって形成された可能性が高い。

このように、藤沢市№106遺跡は縄文時代初頭の古環境や河川利用の実態を明らかにする契機となる遺跡であり、今後の本格的な調査が待たれる。

文　献

小金井市遺跡調査会1989『東京都小金井市野川中州北遺跡－自然科学分析－』
桜井準也1998「礫接合資料の分析－神奈川県藤沢市№419遺跡第１地点の事例から－」『シンポジウム縄文集落研究の新地平２』縄文集落研究グループ
鈴木三男・能城修一1997「縄文時代の森林植生の復元と木材資源の利用」『第四紀研究』第36巻第5号
辻誠一郎1997「縄文時代への移行期における陸上生態系」『第四紀研究』第36巻第5号
中野区教育委員会・中野区松が丘遺跡調査会1989『松が丘遺跡発掘調査報告書』
練馬区遺跡調査会・練馬区教育委員会1982『尾崎遺跡』
藤沢市№419遺跡発掘調査団1997・99『藤沢市№419遺跡第１～５地点

大和市　上草柳第３地点南遺跡

—先土器時代における人と火の関わり—

織笠　昭・會田 信行・上小澤 桂一

所 在 地　神奈川県大和市上草柳 1781 他

調査機関　大和市埋蔵文化財総合調査会・東海大学文学部考古学研究室・スタジオ翼

調査担当　織笠　昭

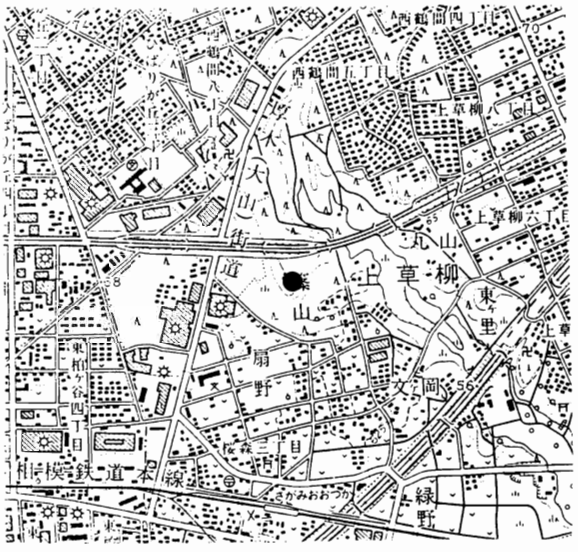
調査目的　学術調査。先土器時代から縄文時代草創期へかけての土層区分。水源地遺跡群の構造把握。細石器文化期における炭化物片の分布とローム層受熱状況の探査。調査の映像記録化。

調査期間　1996 年 3 月 20 ～ 31 日（第 1 次）
1998 年 3 月　5 ～ 18 日（第 2 次）
1999 年 3 月　4 ～ 13 日（第 3 次）
1999 年 8 月 20 ～ 30 日（第 4 次）
2000 年 3 月　2 ～ 10 日（第 5 次）

調査面積　発掘調査　約 28 ㎡
測量調査　約 28,000 ㎡

はじめに

火は人間生活の中で、常に大きな役割を担ってきた。日本の遺跡から火の使用の痕跡は様々な形で検出されているが、先土器時代は炉跡そのものの検出例が少なく、人間と火との関わりについては不明な点が多い。この点を克服するために、石器や礫とともにローム層からの普遍的な出土資料として、細粒炭化物片が注意されている（小田・金山1978）。炭化物は年代測定、古環境の復原、人間の火の使用等を知るための良い資料であるが、多角的な分析例は多くはない。調査はなお継続中であるが、ここでは、細石器文化期における炭化物片分布状態の検討と、この時期としては県内初と思われる炭化物片集中部周辺の残留磁化測定による土壌の受熱分析結果を示し、問題解明の手掛かりを得ることを目的とする。　（織笠　昭）



第１図　遺跡位置図［1:25,000］

1　遺跡の立地（第１図）

本遺跡を含む上草柳遺跡群は、相模川東岸に形成された相模野台地に位置し、引地川の水源地を取り囲むように張り出したヤツデ状台地周辺に広がっている。

上草柳第３地点南遺跡は、水源地西南部に展開する台地の南端部に位置する。北は国道246号線、南は大和市郷土民家園、東西は文ヶ岡223号道路と文ヶ岡227号道路に挟まれており、大和市泉の森内キャンプ場に隣接している。遺跡は、東、西、南側の三方を谷によって開析されており、標高は約66ｍ、低地との比高約10ｍで、相模原面に相当する。現在、台地西側の谷部は盛土されており、南側の斜面部は削平されている。　（藤田健一）

2　調査経緯

本調査は、大和市上草柳1781他に所在する大和市№199遺跡の一部について行なったものである。1978年から国道246号バイパス道路建設に伴って上草柳第3地点東・中央・西遺跡として調査され報告書が刊行された（大和市教育委員会編1984）。本遺跡はその南側一帯にあたる。大和市埋蔵文化財の保管遺物整理事業の補足補充調査及び上草柳第3地点遺跡の分布範囲確認を目的として1996年3月に第1次調査が開始され、第5次調査に至る。このうち第2・3・5次は東海大学の考古学実習を兼ねており、第3・5次では遺跡範囲東部～中央部にかけて城（居）館址と目される中世遺構の測量調査を実施している。発掘調査は遺跡南端部に2m方眼でグリッドを設定し、C・D・E-6グリッド、F・G・H・I-10・11グリッドの2ヶ所を中心として、第2次調査以降、古地磁気学的分析資料と樹種同定用炭化物片資料の採取を併せて行なっている。なお、測量調査も同時に継続中である。　（宮澤正之）

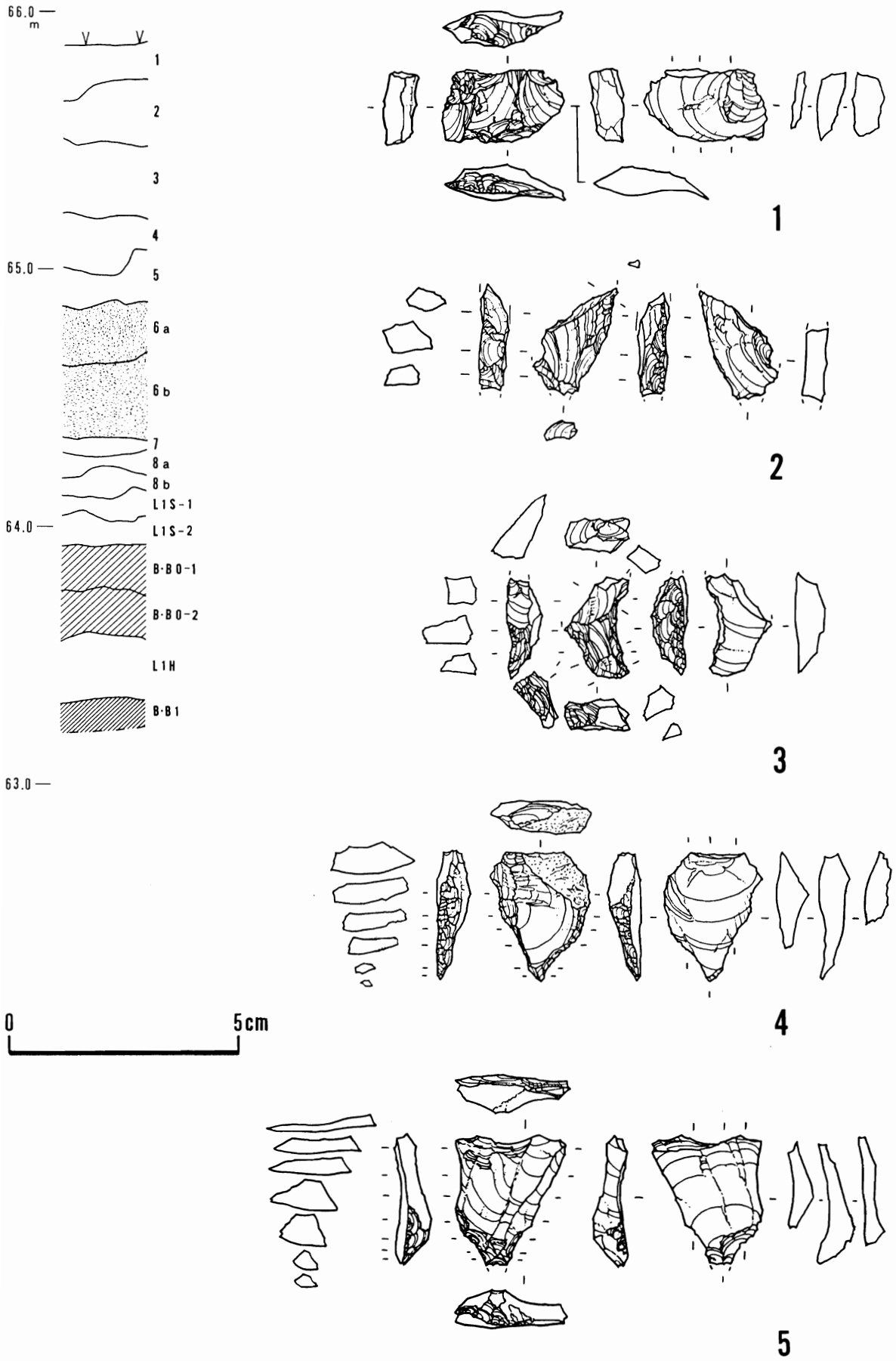
3　調査概要

層位と出土資料（第2図）

土壌堆積の良好な上草柳第3地点南遺跡の調査成果の一つとして、上本進二氏らとともに漸移層、L1S層、B・B0層の細分を行なった点が挙げられる。今後の調査において尖頭器文化期、細石器文化期、縄文時代草創期にかけての編年研究を進めるための最も良好な層位的事例のひとつとなるだろう。詳細は本報告に譲るが、概要は以下のとおりである。なお、文中の出土点数は特に触れない限り、F・G・H・I-10・11グリッドの出土点数である。

第1層は下部に宝永スコリアを混在する現表土。第2層は下部に貞観・延暦前後のスコリアをブロック状に含む黒褐色土。第3層は赤色スコリアを多く含む黒褐色土。第4層は赤色スコリアを多く含む暗茶褐色土。第5層は所謂褐色帯。下底部は波状を呈す。第3層から第5層では、D'-25、G-6グリッドより縄文時代中期の土器片3点と、B-25、G-6グリッドより礫3点が出土した。第6a層は所謂富士黒色火山灰。スコリアをほとんど含まない黒色土。第6b層は第6a層と同様、富士黒色火山灰。スコリアを多く含む点で上層と区分される。第7層は所謂漸移層。スコリアを多く含むが、土質は第6層と同様。第8a層は第7層と同様、漸移層。第7層と同様のスコリアを多く含むが、赤褐色を呈し、著しく硬質となる点で第7層と区分できる。第8b層は第8a層と同様であるが、スコリアが少なくなる点で区分される。

以下はローム層である。L1S-1層はスコリアを多く含む黄褐色ローム層。下部に赤色スコリアと黒色スコリアが目立つ。L1S-2層はスコリアを多く含むが、上下層に比べ、粘性が弱い。C'-28グリッドにおいてL1S層より礫1点が出土している。B・B0-1層は全体に暗色味を帯びる。上下層に比べ、粘性が強い。下部からスクレイパー1点、微細な剥離痕のある折断剥片2点、折断剥片1点が出土した。なお、E-6グリッドでも微細な剥離痕のある折断剥片が1点出土した。また、B・B0-1層の下部を中心に炭化物片集中部が、D・E-5・6グリッドで1ヶ所、F・G・H・I-10・11グリッドで1ヶ所、精査・検出された。B・B0-2層は、B・B0-1層と同様、全体に暗色味を帯びる。明褐色のブロックがまだらに入る。上部から折断剥片1点、下部から尖頭器1点、折断剥片1点が出土した。L1H層は全体に赤褐色を呈し、黒色スコリアと赤色スコリアを多く含む。錐形石器（ドリル）2点、スクレイパー1点、折断剥片2点、砕片1点が出土した。本遺跡のB・B1層はB・B0層よりも暗色度が低い。黒色スコリアと赤色スコリアを多く含み、下部になるほど青色スコリアが増える。上部



第2図　層位と出土石器（1：B・B0-1下部　2：B・B0-2下部　3～5：L1H）

からスクレイパー1点、微細な剥離痕のある折断剥片1点、折断剥片3点が出土し、下部ではD-6グリッドより石核1点が出土した。（勝山百合）

出土した石器の特質（第2図）

1はB・B0-1下部出土。細石核打面再生剥片の末端部に刃部調整を施したスクレイパーである。石材はチャート。

2はB・B0-2下部出土。横長剥片を石器長軸上横位に用いた周縁調整尖頭器である。両端部を欠する。錐形石器（ドリル）の破損例ともみなし得る。石材はチャート。

3～5はL1H出土。いずれも打面転位を頻繁に繰り返す過程で剥出された剥片を、石器長軸上縦位に用いている。3は両側に抉入状刃部を有するノッチド・スクレイパー。左上半部を欠する。

4は打面部とその直下以外のすべての周縁部に加工の施された錐形石器。右下半部は抉入状調整に続く鋭い先端部を形成している。先端部には微細な潰れ痕が、裏面には先端部方向からのごく細長の剥離痕が認められる。いずれも使用の結果であると予測される。

5は先端部のみ集中的に加工した錐形石器。両側の調整痕は抉入状に近い。4・5はともにドリルースクレイパーとしての複合石器として理解することも考慮される。3・4は珪質な石材を用いている。5はチャート。

なお、石器実測は織笠明子、織笠昭、藤田健一、宮澤正之が、墨入れを織笠昭が行なった。また、各石器の出土位置については、第3図に示したとおりである。（織笠　昭）

炭化物片の分布とその概要

炭化物片集中部において検出された炭化物片は、肉眼で観察されたすべての資料を取り上げ、出土位置を記録した。なお、検出面は標高を±1㎝前後に合わせた。これまで、F・G・H-10・11グリッドにおいて、11回にわたる炭化物片の精査を行なった。その中で最も多くの炭化物片が出土したのは、第2次第2面（B・B0-1下部）である。取り上げた全点を実体顕微鏡（×40）で観察し、炭化物片以外のスコリア等を除去した結果、出土点数は121点であった。分布の傾向としては、グリッドの東側に集中を見せ、西側及び壁際部分では、ほとんど検出されていない（第4図）。また、残留磁化測定の結果と照らし合わせてみると、磁化強度が最も強い部分では、炭化物片があまり出土していない（第6図）。

11回にわたる精査から、炭化物片の出土の傾向としては、第2次第2面の121点をピークとし、第3次以降、発掘面を下げるに従い、点数が減少している。分布の傾向としては、第2次ではグリッドの東側に片寄りを見せていたが、発掘面が下がり、出土点数が減少するにつれ、分布が広がり、疎らになっている（第5図）。（深澤幸江）

B・B0層の残留磁化測定

＜目的＞

炭化物が多く含まれていたB・B0層について残留磁化測定を行なった。炉址や焚火址など、熱を受けた場所の残留磁化は熱残留磁化であり、まわりの土壌の残留磁化（堆積残留磁化や粘性残留磁化）とは区別できる。

森永ほか（森永ほか1989）の焚火実験では、焼けた土壌の残留磁化の特徴として次の3点を指摘している。

(1) 自然残留磁化強度が大きい。

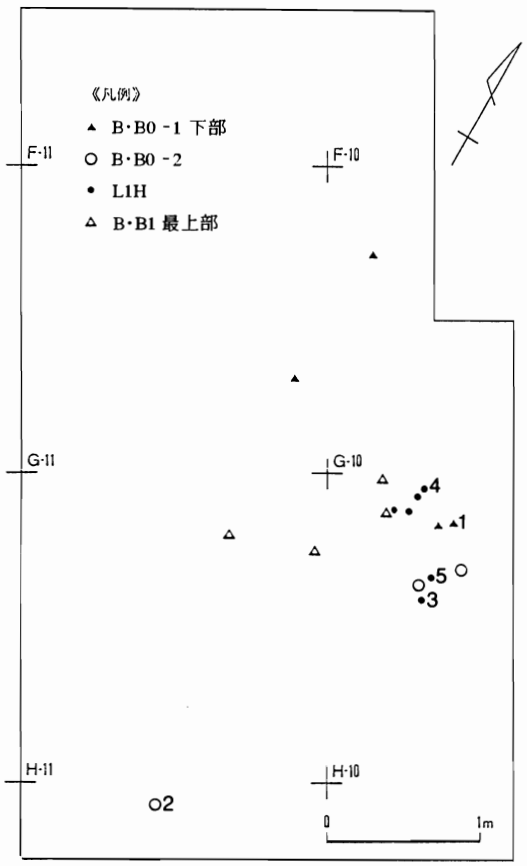
(2) 残留磁化が交流消磁に対して安定である。

(3) 残留磁化方向が特異または安定している。

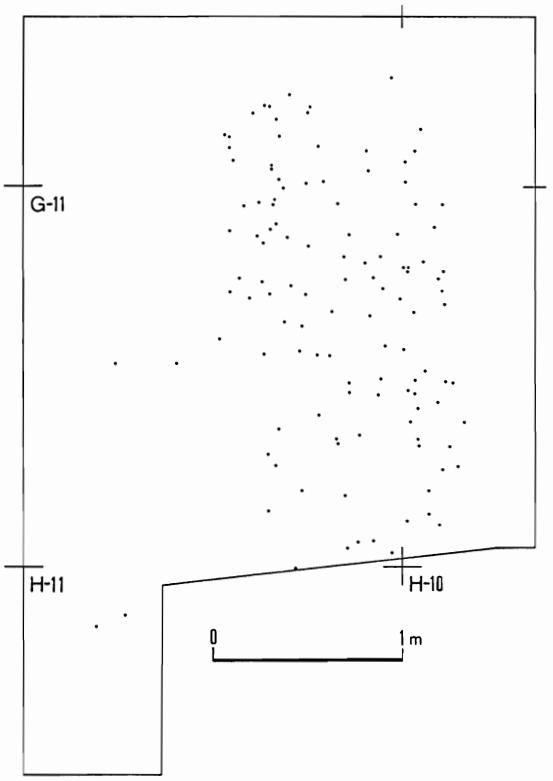
今回B・B0層の残留磁化の特徴を明らかにする中で、熱を受けた場所の可能性の有無に言及する。

＜試料採取と測定＞

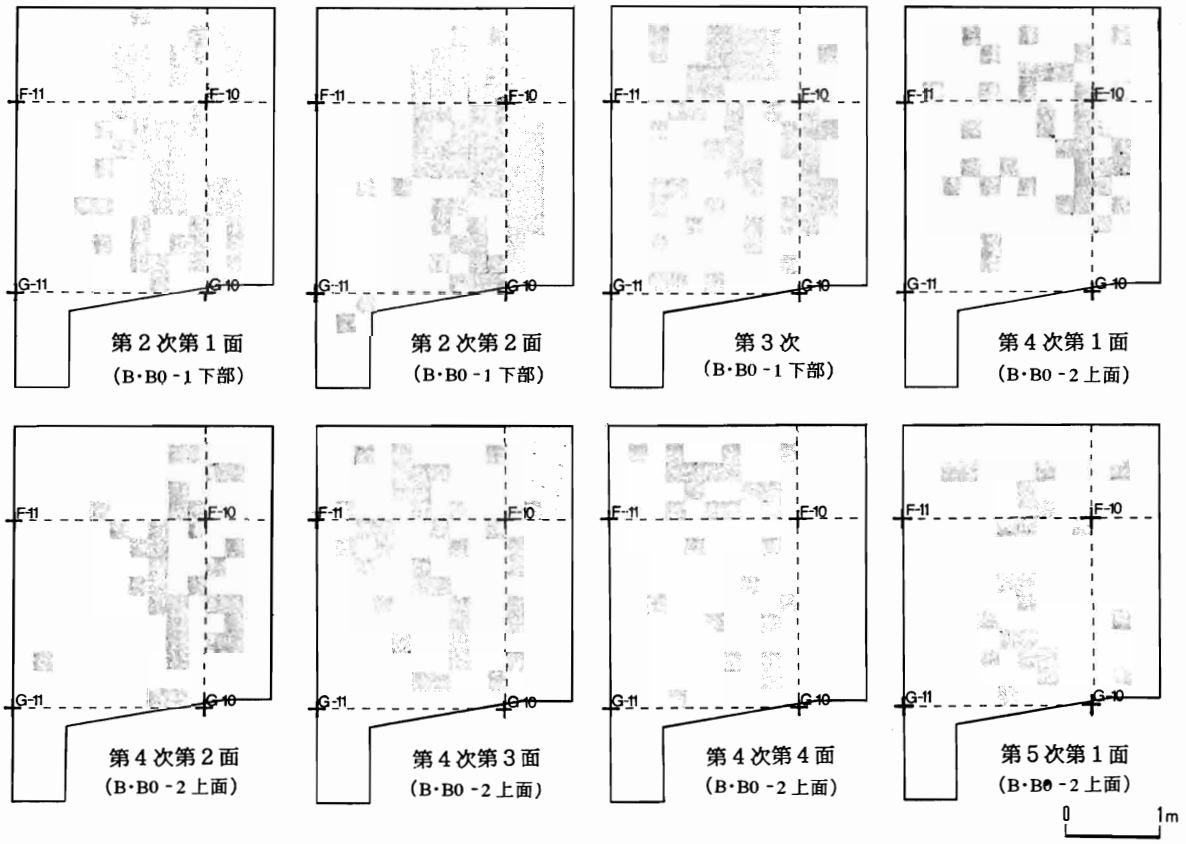
試料採取には、市販の古地磁気測定用に開発されたPC製カプセル（1インチ立方）を用いた。カ



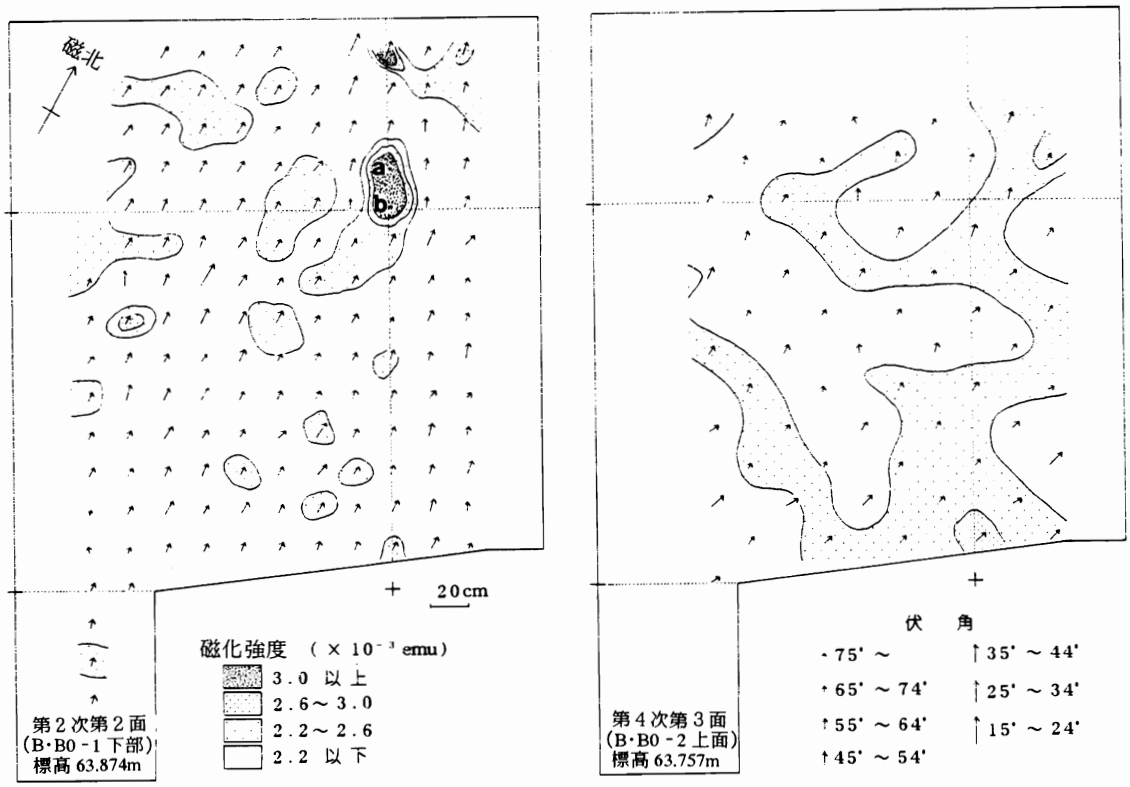
第３図　石器分布図



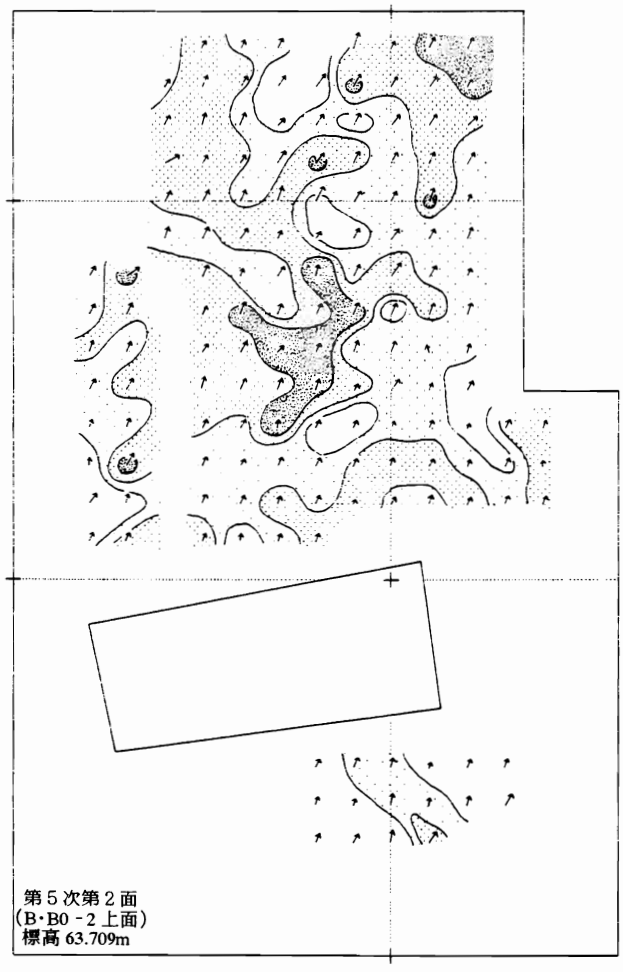
第４図　第２次第２面炭化物片分布図



第５図　炭化物片分布変遷図（網部は炭化物片出土小グリッド）



第6図　残留磁化方位と磁化強度分布（1）



第7図　残留磁化方位と磁化強度分布（2）

プセルを磁北方向にそろえた後、グリッド面から垂直に押し込んで採取した。

試料採取はB・B0層中の次の3層準で行なった。

(1) 第2次第2面（B・B0-1下部、標高63.874 m）
　：20㎝間隔で151個

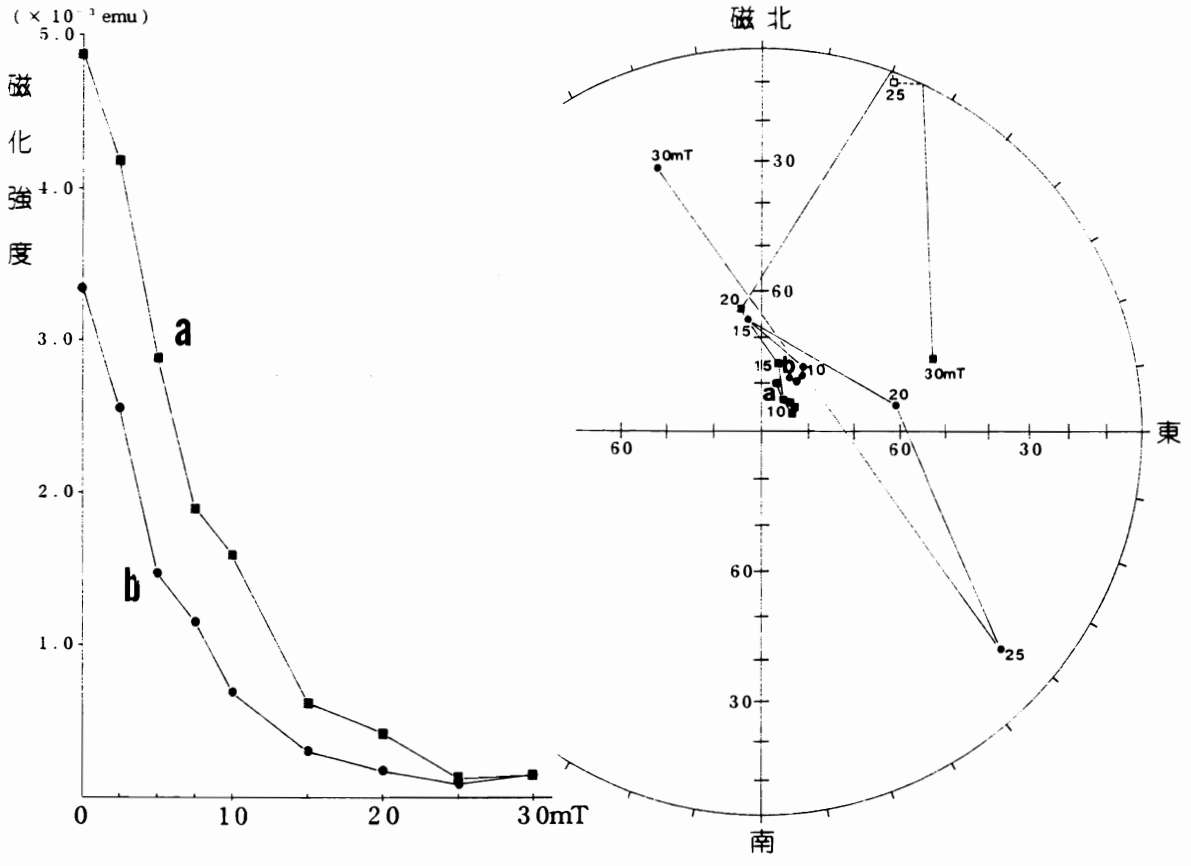
(2) 第4次第3面（B・B0-2上面、標高63.757 m）
　：40㎝間隔で61個

(3) 第5次第2面（B・B0-2上面、標高63.709 m）
　：20㎝間隔で150個

測定には千葉県水質保全研究所地質環境研究室のスピナー磁力計（夏原技研SMD-88）を使用した。試料の安定性を交流消磁で確かめた。

＜測定結果＞

測定の結果、磁化方位（偏角・伏角）と磁化強度が得られる。全体に磁化方位は現在の磁化方向に近く、試料の残留磁化の特徴（粘性残留磁化が主体）をよく示している。磁化強度は2.5×10－3 emu以下のものが多く、3.0×10－3 emu以上を示す試料は少ない（最大は4.94×10－3 emu）。



第8図　交流消磁にともなう磁化強度と磁化方位の変化

測定結果を層準ごとに平面図に示した(第6・7図)。磁化強度を4段階に分けて表し、矢印で磁化方位を示した。磁化強度は第4次第3面(B・B0-2上面)で小さく、第5次第2面(B・B0-2上面)で全体に大きい。

熱を受けた試料は、磁化強度が10～100倍大きくなり、磁化方位も周りとは異なることが立川ローム層で知られている（會田1987)。磁化強度が10倍以上大きい試料は認められないが、磁化強度が最大の試料は第2次第2面(B・B0-1下部)にあり（第6図のa)、磁化方位が周囲の試料とは大きく異なっている。隣の試料（第6図のb）も磁化強度が大きく、しかも磁化方位がaと似ている。このことは、確実とはいえないが、熱を受けた可能性が高いことを示唆する。この2試料について、交流消磁テストを実施した。結果を第8図に示す。7.5×10mTで消磁した後の磁化方位が初生磁化方位を示すと考えられる。消磁前の磁化方位とあまり変わらない。

第5次第2面(B・B0-2上面)にも磁化方位がやや大きい試料が集中するが、磁化方位が周囲のものとほぼ同じであることから、熱を受けた可能性は低いと考えられる。これと類似した傾向は他の遺跡でも知られている（會田1994)。　（會田信行）

4　成果と課題

1）　現状ではB・B0-1下部、B・B0-2下部、L1H、B・B1上部、B・B1下部の少なくとも5枚の先土器時代文化層が確認される。炭化物片の集中部はB・B0-1下部に伴う。発掘範囲が狭いため各層のブロックの完掘例は無く、全容の把握は今後の課題である。だが、出土した二次加工石器のほとんどが加工具であることは、注目すべき点である。このうち第2図4の錐形石器は形態的に著しく整っている。相模野のL1H層、あるいは西南日本の尖頭器文化や細石器文化全体を見渡しても、このような例はほとんど見られない。従来、注目されることの少ない石器であるので今後、十分な比

較検討を行ないたい。

2）　炭化物片集中部の資料は全点取り上げを実施している。顕微鏡による全点の確認と今後の観察の継続により可能な限り樹種同定を試み、古環境の復原及び炭化物片集中部の人為性とそこにおける人間と火とのかかわり、言いかえれば火処と石器との相関関係を探求する。

3）　ローム層中における残留磁気測定結果の公表は神奈川県内では初めてのことである。磁化の強さは受熱の度合いの強さを示すものと考えられるが、その高率部と炭化物片の集中部と石器の分布とは微妙なズレを示していた。本来の火処はどこか、そして火処をめぐる人間行動とは如何なるものかを復原するための調査と分析の継続が必要である。水源地をめぐる遺跡群の形成過程とその構造、そしてその中での人と火との関わりに迫るための資料は集積されつつある。従来の大規模調査とは異なる状況下での調査であるが、複眼的な視点から調査を深めていきたい。

4）　発掘地点東部の引地川側に広がる台地上の文ヶ岡223号道路は、1978年調査時に上草柳第3地点東遺跡で確認された中世の溝状遺構の延長部に相当し、空掘の痕跡と推定される。この周辺が城（居）館址等の中世遺構である可能性が高く、関根孝夫教授・禿　仁志教授を中心に測量調査を継続中である。

5）　本調査の経過は上小澤桂一を中心とするスタジオ翼により、ドキュメンタリー・ビデオとして記録化を継続している。今回、その一部について作品化したものを上映するが、今後、調査の要点にしたがった内容や、スタジオ翼独自の視点からの作品製作を企画している。

炭化物片集中部の調査実施において協力していただいていた東京都埋蔵文化財センター千野裕道氏は、1999年7月に逝去された。この研究の継続をもって千野氏への追悼としたい。

（織笠　昭・織笠明子）

参考・引用文献

會田信行1987「第4地点におけるローム層の古地磁気測定」『千葉市子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡』千葉市教育委員会・（財）千葉市文化財調査協会

會田信行1994「立川ローム層（Ⅸc層）の残留磁化測定」『市原市南青野遺跡』（財）千葉県文化財センター

小田静夫・金山喜昭1978「先土器時代遺跡の炭化物片分布―先土器時代研究の新たな視点―」『第四紀研究』17-3　日本第四紀学会

工藤敏久・千野裕道・阿部祥人1983「先土器時代における火の使用―木炭片の分布状態と樹種同定からの接近―」『考古学ジャーナル』222　ニュー・サイエンス社

森永速男・井口博夫・山下秀樹・久保弘幸・藤田　淳・安川克巳1989「古地磁気的手法による先土器遺跡の炉址検出法の開発とその有効性」『第四紀研究』28-3　日本第四紀学会

大和市教育委員会編1984『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告Ⅱ』大和市文化財調査報告書第15集　大和市教育委員会

大和市教育委員会編1992『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書―上草柳遺跡群・台山遺跡篇―』大和市文化財調査報告書第48集　大和市教育委員会

神奈川県下貝塚調査の思い出

江坂 輝彌

私が神奈川県下の貝塚を歩くようになったのは1935（昭和10）年頃からであり、今から半世紀余前のことである。日本で縄文時代の貝塚遺跡が最初に記録されたのは非常に古く、今から約1,300年前に編さんされた常陸風土記に巨人伝説として茨城県水戸市東郊の大串貝塚の記されたものが嚆矢をなすものであり、考古学的に学術調査がなされたのはこれより遥かに新しく、米国から日本に来られ、東京大学でお傭外人講師として進化論を講じられたEDWARD. S. MORSE（エドワード モース）が1877（明治10）年、東京都大森貝塚 (1) の発掘調査を実施し、1879年、東京大学理科大学欧文紀要第1冊として『大森の貝塚』を刊行されたものが最初である。

神奈川県下における貝塚の発見はこれより遅れること16年、1893（明治26）年3月、井上喜久治・鳥居龍蔵の両氏が、今日の東京都品川区・大田区付近より多摩川を渡り、川崎市千年子母口、横浜市港北区高田町方面の貝塚遺跡踏査が最初のものであろうか。当時発行の『東京人類学会雑誌』第8巻第85号に井上・鳥居両名で「貝塚七ヶ所の記」という報文を発表してる (2)。なおこれより先に1892年4月刊行の『東京人類学会雑誌』第7巻第73号に若林勝邦が「下総武蔵相模ニ於ケル貝塚ノ分布」で遺跡分布所在地図と遺跡地名を記載、横浜市港北区高田貝塚と三浦半島の吉井と久比里に貝塚の所在することのみ記したものがある (3)。

1900年代に入ると『人類学雑誌』『考古学雑誌』などに県下の貝塚に関する多くの報告が出たが、1920年代に入ると谷川磐雄（大場磐雄）が県下横浜市港北区内の縄文前期末の諸磯式土器出土貝塚を各地で小発掘調査し、『考古学雑誌』上に1924（大正13）年以降「諸磯式土器の研究」を連載した (4)。

1926年、大山史前学研究所が設立され (5)、東京帝国大学理学部人類学科の選科を卒業された宮坂光次・甲野勇氏らが同研究所に所員として赴任され、同研究所で関東地方各地の貝塚を小発掘調査し、関東地方の東京湾に注ぐ主要渓谷の貝塚に於ける縄文土器文化の編年的研究が実施され、1927年以降、1931年頃まで、川崎市高津区子母口貝塚を始め、神奈川県内各地に所在の貝塚遺跡も数多く小発掘調査が行われた。

筆者が考古学に興味を持ち始め、世田谷区内の縄文文化の遺跡で、黒曜石製の石鏃・土器片などを表面採集したのは1934年頃のことで、杉並区下高井戸4丁目の塚山遺跡で縄文文化中期前半の竪穴住居跡を発見発掘したのが翌1935年のことであった。そして1937年8月、國學院大学國史教育講習会の実地見学で、大場磐雄・樋口清之両氏の指導で、横浜市港北区（発掘当時は神奈川区）下田町1丁目東の3号貝塚を発掘し、貝層下にローム層面をかためた平坦面が

発見され、竪穴住居跡の床面の可能性もあり、この実地見学の発掘を手伝った酒詰仲男・芹澤長介・筆者の3名に、事後の発掘調査を委ねられたのであった。

竪穴住居跡を廃屋として、その凹みに貝殻を始めとする食料残滓を投棄した、ごみ溜貝塚の発掘は筆者としてはこれが始めての経験であったが、8月4日から8日までの間に、この一戸の竪穴住居跡を完掘した。この成果は酒詰・芹澤・江坂の連名で1937年11月刊の『考古学雑誌』第27巻第11号誌上に発表(6)、さらに貝塚出土の土器の編年的観察は翌38年5月刊の『考古学雑誌』第28巻第5号に「横浜市神奈川区（現在は港北区）下田町（現在は下田町1丁目）東貝塚三号貝塚に於ける土器について」という報文を江坂が執筆している。

この発掘で竪穴住居跡の中央東南部よりで、口径19cm、高さ10.8cm、底径19cmのたらい型薄手土器（器厚2mm前後）は、羽状縄文とシジミと思われる貝殻腹縁による爪形文の施文された土器で、今は東京国立博物館の考古の陳列室に常陳されているが、この土器は近畿地方に分布する前期末の北白川1式土器で、関西での作品が、関東地方へ将来されたものであろうか。

この発掘より以前に横浜市都筑区折本貝塚で平等直照（びょうどうなおてる）氏が1931年発掘した縄文文化前期末の竪穴住居跡発掘例が1例知られていたが、この下田町東貝塚で発掘した1戸の竪穴住居跡発掘以後、江坂・酒詰・和島などによって都筑（つづき）区茅ヶ崎町旧字境田貝塚（前期諸磯a式）、港北区篠原町貝塚（前期諸磯a式）、港北区富士塚2丁目貝塚（後期堀之内式）などの貝塚と貝層下の竪穴住居跡を1942年10月応召前に調査した。このほか42年10月前に横浜市港北区菊名5丁目所在の菊名宮谷（みやたに）貝塚（前期初頭花積下層式）、同一台上の尾根が境界線のため、東斜面になる鶴見区上の宮1丁目所在の宮谷と同一時期の貝塚も桑山龍進氏の調査中のところを見学し、ここより北方6kmにある港北区下田2丁目1番地に所在のほぼ同一形式の花積下層式土器を出土する下組（しもぐみ）貝塚を発掘調査した。

菊名式の別称もある前期初頭の花積下層式土器を出土の貝塚遺跡は都筑区勝田町にあった竪穴住居跡内に所在の小貝塚を桑山龍進氏が発掘されたものが知られる程度であまり数多くない。

花積下層式土器を出土する貝塚は神奈川県下外では、赤羽駅に近い東京都北区中十条4丁目15番地付近に所在した王子清水坂貝塚、千葉県市川市宮久保1丁目貝塚、埼玉県春日部市花積貝塚、茨城県新治郡小川町野中貝塚、同県東茨城郡常澄村（現在は水戸市塩崎町）大串貝塚が知られている。

加藤明秀・芹沢長介両氏が1936年11月刊の『考古学』第7巻第9号に「静岡県下に於ける細線紋指痕薄手土器と其伴出石器」なる報文を発表している。ここで出土する木島1式・2式という薄手土器が南関東地方の花積下層式土器に伴存する遺跡と、伴存しない場合がある。

神奈川県下の前期初頭の貝塚遺跡研究でこの問題など取上げてみたいと思う。

編集部註

(1)　東京都大田区山王、品川区大井に位置する縄文後期の貝塚。モースの東京大学在職は1877～79年。

(2)　神奈川県内は橘樹郡子母口村・久末村、都筑郡高田村。現在の川崎市高津区子母口・久末、横浜市港北区高田町。筆者が子母口貝塚の調査に関係したのは1937年12月から翌年1月の山内清男・甲野勇・八幡一郎等が行なった第二地区および1941年4・5月の三森定男等が行なった第二地区西側隣接地点のもの。

三森定男 1941「子母口貝塚の発掘」『科学画報』7月号

江坂輝彌 1988「子母口貝塚」『川崎市史資料編1』

(3)　県内はこのほかに横須賀海軍病院構内および中村（現在の横浜市南区中村町）が挙げられている。

(4)　1924年 第14巻第9号・第11号、1925年 第15巻第1号に3回連載

(5)　陸軍少佐・公爵であった大山　柏が創設、所長を勤める。柏の父は巌

(6)　「横浜市神奈川区下田町（東）貝塚に於ける一住居阯の発掘に就いて」

主な登場人物略譜

エドワード・シルベスター・モース　1838～1925　アメリカ合衆国

若林　勝邦　1862～1925　江　戸　東京大学助手

鳥居　龍蔵　1870～1953　徳　島　東京大学助教授　燕京大学・上智大学教授

大山　柏　1889～1969　鹿児島　大山史前学研究所長　慶應義塾大学講師

大場　磐雄　1899～1975　東　京　國學院大学教授

甲野　勇　1901～1967　東　京　国立音楽大学教授

山内　清男　1902～1970　東　京　成城大学教授

八幡　一郎　1902～1987　長　野　東京教育大学・上智大学教授

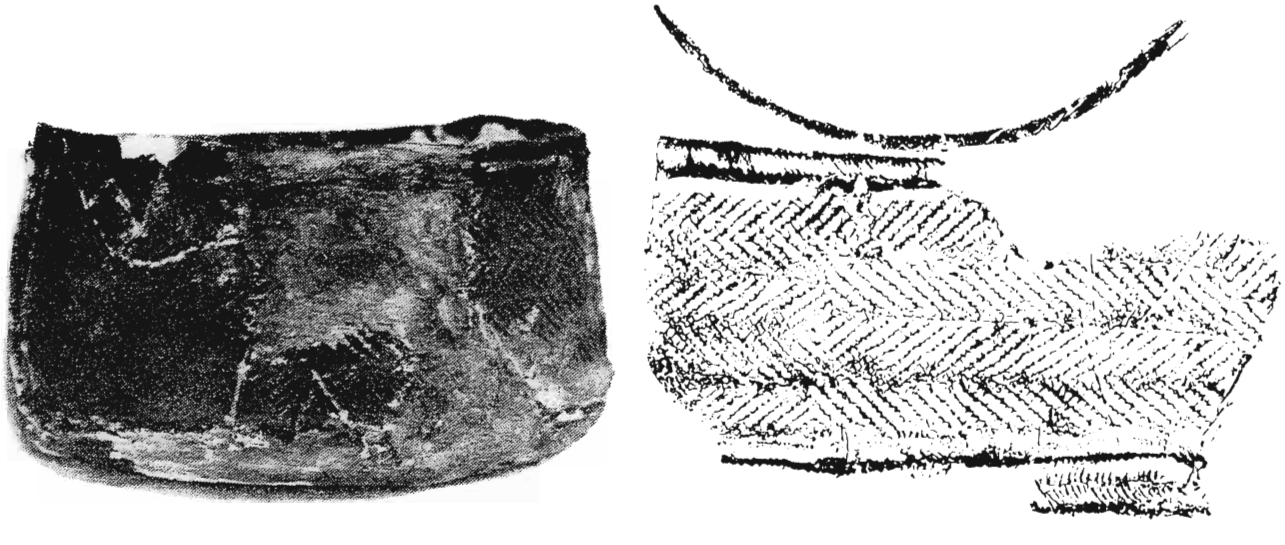
酒詰　仲男　1902～1965　東　京　同志社大学教授

三森　定男　1907～1977　神奈川　北海学園大学教授

樋口　清之　1909～1997　奈　良　國學院大学教授・國學院栃木女子短期大学長

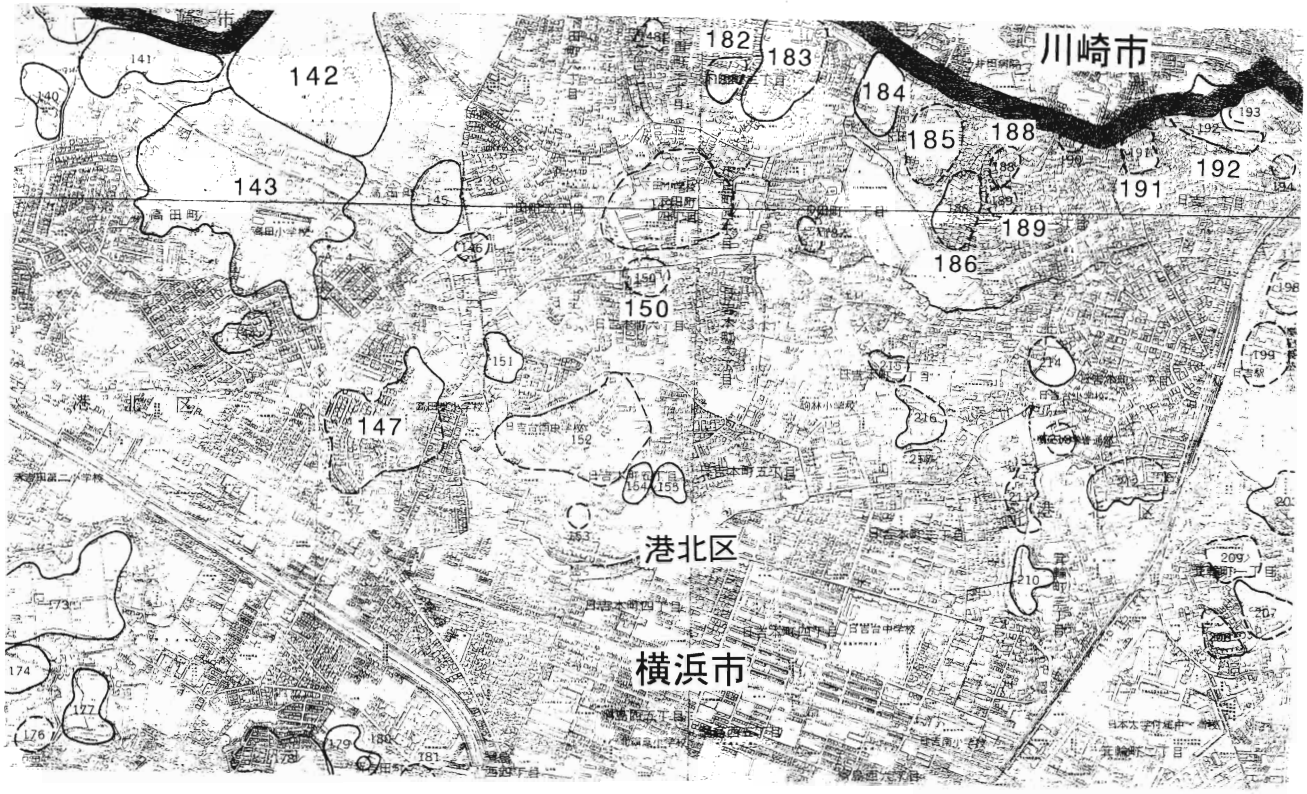
和島　誠一　1909～1971　東　京　東洋大学・岡山大学教授

芹澤　長介　1919～　静　岡　東北大学名誉教授



第1図　下田町東貝塚出土土器

（江坂 1937・38『考古学雑誌』27-11、28-5 より）

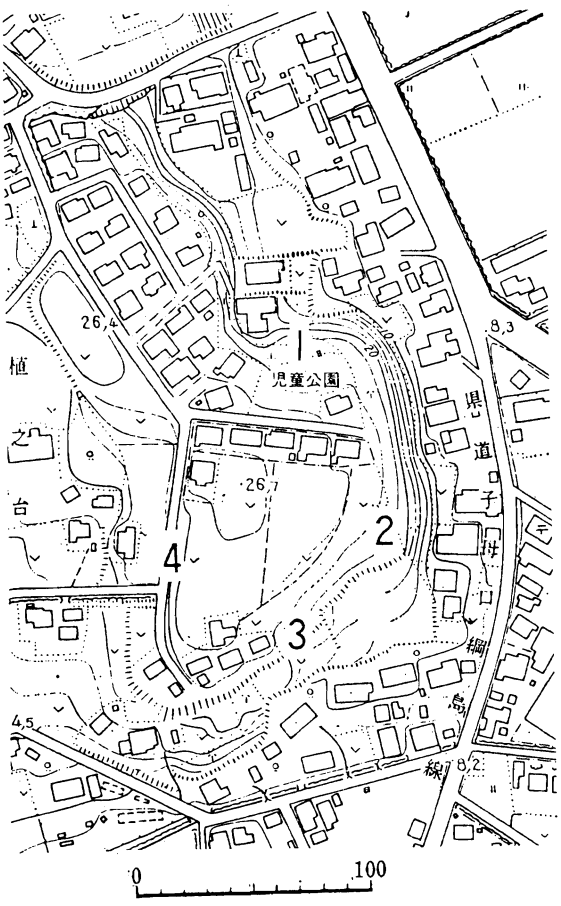


第2図　下田東貝塚周辺の縄文遺跡

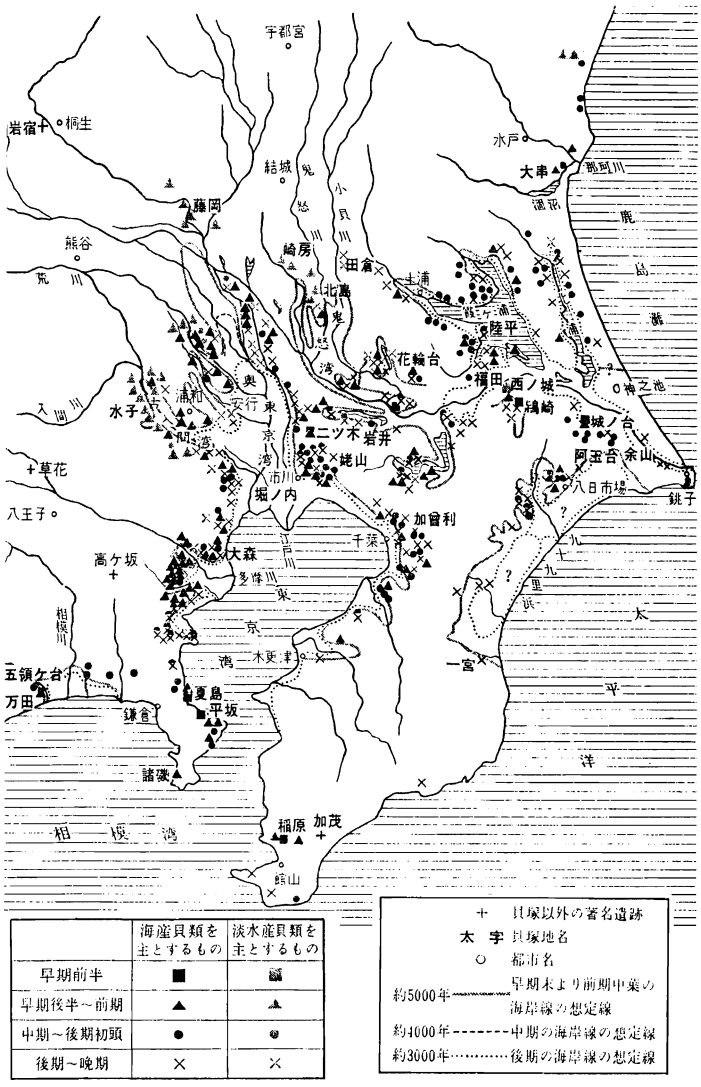
142：**高田貝塚**　143：寺谷戸遺跡　147：高田町遺跡　150：中組第一遺跡　182：中駒遺跡　183：杉並遺跡　184：下田西貝塚
185：**下田東貝塚**　186：下組西貝塚　188：下組東貝塚　189：下組南貝塚　191：矢上谷戸貝塚　192：矢上上ノ町遺跡

主要貝塚関連文献

高田貝塚：江坂輝彌 1972「港北区高田貝塚の調査」『考古学ジャーナル』74
下組貝塚：西村正衛・中沢　保 1954「神奈川県横浜市港北区下田下組西貝塚」『古代』1・2
折本貝塚：八幡一郎 1931「武蔵折本貝塚に石器時代の竪穴発見」『人類学雑誌』46-11
池田健夫 1932「折本貝塚を探る」(2)『丘の上』9
Ｉ・Ｋ（池上啓介）1931「折本貝塚に於ける竪穴の発見」『史前学雑誌』3-5
大山　柏・池上啓介 1934「鶴見渓谷諸磯式文化　神奈川県都田村折本貝塚」『関東縄紋文化編年学的研究資料』2
桜井清彦 1969「神奈川県横浜市折本貝塚」『日本考古学年報』17
境田貝塚：酒詰仲男・江坂輝彌 1939「神奈川県都筑郡境田貝塚調査報告」『考古学雑誌』29-7
伊藤　郭・坂本　彰 1979「境田遺跡の調査」『調査研究集録』4
篠原貝塚：松下胤信 1931「神奈川県港北区篠原貝塚調査小報」『史前学雑誌』3-5
石野　瑛 1964「神奈川県横浜市篠原遺跡」『日本考古学年報』12
中村若枝 1988『横浜市港北区公団篠原団地内貝塚資料』
菊名貝塚：松下胤信 1931「武蔵菊名宮谷遺跡調査予報」『史前学雑誌』3-4
桑山龍進 1939「神奈川県菊名・上の宮両貝塚出土の微薄なる土器に就いて」『東京人類学会・日本民族学会併合大会第三回記事』
桑山龍進 1949「菊名貝塚と其の文化」『大正大学史学会』
桑山龍進 1950「菊名貝塚の土器について」『日本考古学協会発表要旨』6
桑山龍進 1980『菊名貝塚の研究』
富士塚貝塚：石野　瑛 1951「横浜市錦ヶ丘および富士塚遺跡「『日本考古学年報』1



第3図　子母口貝塚
（江坂1988「子母口貝塚」
『川崎市史資料編1』より）



	海産貝類を主とするもの	淡水産貝類を主とするもの
早期前半	■	▩
早期後半～前期	▲	▲
中期～後期初頭	●	●
後期～晩期	×	×

第4図　南関東における縄文各期の海岸線と主要貝塚分布図
（江坂1973『古代史発掘2縄文土器と貝塚』より）

講師紹介

江坂輝彌先生は1919年、東京都のお生まれ。慶応義塾大学卒業ののち助手・講師・助教授を経て教授。現在は名誉教授。主著に『土偶』(校倉書房1960)『日本原始美術2土偶・装身具』(講談社1964)『日本文化の起源』(講談社現代新書1967)『古代史発掘2縄文土器と貝塚』(講談社1973)『古代史発掘3土偶芸術と信仰』(講談社1974)『縄文式土器』(小学館1975)『韓国の古代文化』(学生社1978)『縄文土器文化研究序説』(六興出版1984)『考古学の知識』(東京美術1986)『日本の土偶』(六興出版1990)など。

※19～21頁は先生の原稿に基づき編集部で作成した。誤りがあればその責は編集部にある。

小田原市　羽根尾貝塚と泥炭層遺跡

戸田 哲也・舘　弘子

所 在 地　小田原市羽根尾

調査機関　羽根尾工業団地内遺跡発掘調査団

調査担当　戸田哲也・舘　弘子・佐々木達郎

調査目的　区画調整事業に伴う埋蔵文化財の事前調査

調査期間　1998年8月19日～1999年7月17日

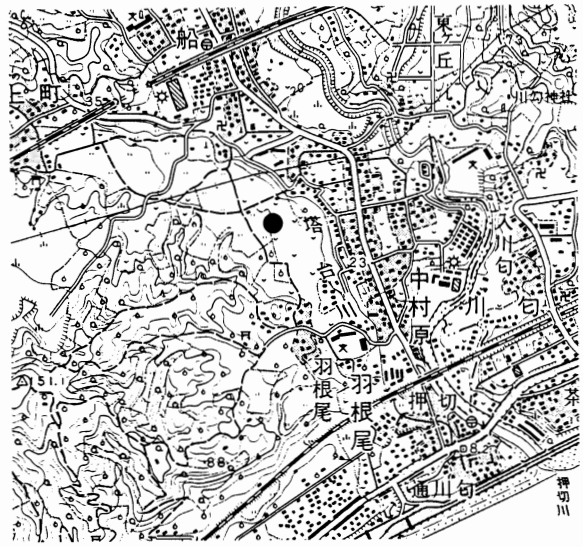
調査面積　約3,750㎡

1　遺跡の立地

本遺跡は、大磯丘陵の西端に近い曽我丘陵から北東部に開けた沖積地へと延びる標高26mを測る丘陵先端部斜面に立地する。縄文時代前期の貝塚および遺物包含層は、現地表下２～４mの泥炭層中より発見された。本遺跡は、相模川以西の神奈川県域において３箇所目の貝塚遺跡となる。

遺跡の立地する羽根尾地区を含めた二宮から国府津にかけては、地盤の隆起・沈降の激しい地域として知られる。今回の調査で、アカホヤ火山灰層が地表下約5.5mより確認され、さらに、その直下よりマガキ・ハイガイなどを含む自然貝層が検出された。このことから、当地域は縄文時代早期末葉から現在までに少なくとも20m前後隆起したことが判明した。従って、遺跡が形成された縄文時代前期前半では、標高は現在よりもはるかに低かったものと考えられ、縄文海進期において、入江状の内水面に立地していたと推察される。

周辺に所在する同時期の貝塚としては、相模川河口域に属する平塚市万田貝塚、茅ヶ崎市西方貝塚があげられる。万田貝塚は、本遺跡に最も近い北東８㎞の距離にあり、標高10mの台地斜面に形成されたキサゴ・ダンベイキサゴを主体とする貝塚である。西方貝塚は、本遺跡の北東方向約17㎞に位置する。住居址内よりヤマトシジミを主体とする貝層が検出され、黒浜式土器と東海系の「上の坊式土器」が共伴することが確認されている。



第１図　遺跡位置図［1:25,000］

2　調査経緯

今回の調査は、羽根尾工業団地の建設に伴って行われたものである。

羽根尾工業団地内遺跡群の調査は平成５年の試掘以来、丘陵部のＡ地区、沖積地部分のＢ地区とに分け、足かけ７年間にわたり断続的に行われてきた。その結果、縄文～近世の各時代にわたる多くの遺構・遺物が発見された。

そうしたなかで、縄文時代前期の羽根尾貝塚は、最終年度の平成10年９月から同11年７月にかけて調査された。調査の工程上、尾根を境として大きく二つの地区に分割し、尾根の北側を３Ｂ区（1,875㎡）、南側を３Ｃ区（1,425㎡）と呼称した。また、谷を隔てた別尾根先端部からも同時期の縄文時代前期前半に属する小貝塚および包含層

が発見され、これを５区（400㎡）とした。

３　調査概要

ここでは紙数の関係上、地点の離れた５区は割愛し、３Ｂ・３Ｃ区について詳しく見てゆきたい。

３Ｂ・３Ｃ区の立地する尾根の基盤層は、南側では断層崖のため垂直に落ち込んでおり、北側では約20～30度の角度をもって傾斜している。その斜面部に形成された遺物包含層は、尾根の高い方から低い方へと向かって堆積し、３Ｃ区の方がやや急傾斜をなす（写真１）。土層は、上層より弱分解質泥炭層、尾根からの流入と考えられる泥岩ブロック層、最下層の分解質泥炭層の３層に大きく分けられる。土層の層序、堆積状態については、両区とも基本的に同様で、各層の層界から遺物が集中的に出土するというあり方も類似する。ただし、３Ｃ区には弱分解質泥炭層の上に泥岩ブロックを含む青灰色シルト層が存在し、同層中に土器・獣魚骨等多量の遺物が包含されている点が異なる。

３Ｂ区

本地区からはテン箱約90箱分の遺物が出土した。時期的には、関山Ⅰ式から諸磯ａ式にかけての限定された時期であることを特徴とする。また、泥炭層中に遺物包含層が形成されたため、木製品・編み物・縄・骨角器・自然遺物等、保存状態の極めて良好な有機質遺物が多量に検出された。

東西50m、南北30mに及ぶ調査区の中で、遺物が濃密に検出されるのは標高23～24mのライン沿いに限られ、６m前後の幅で尾根筋に沿って東西方向に帯状に遺物が分布する様相が捉えられた。また、遺物が集中する範囲に重複するかたちで、斜面に並行する樹木の集積が検出された。杭の打ち込み等が確認されなかったことなどから、人工的な構築物と積極的に判断する材料に乏しいが、木道などといった人為的な遺構の可能性も考慮に入れる必要がある。

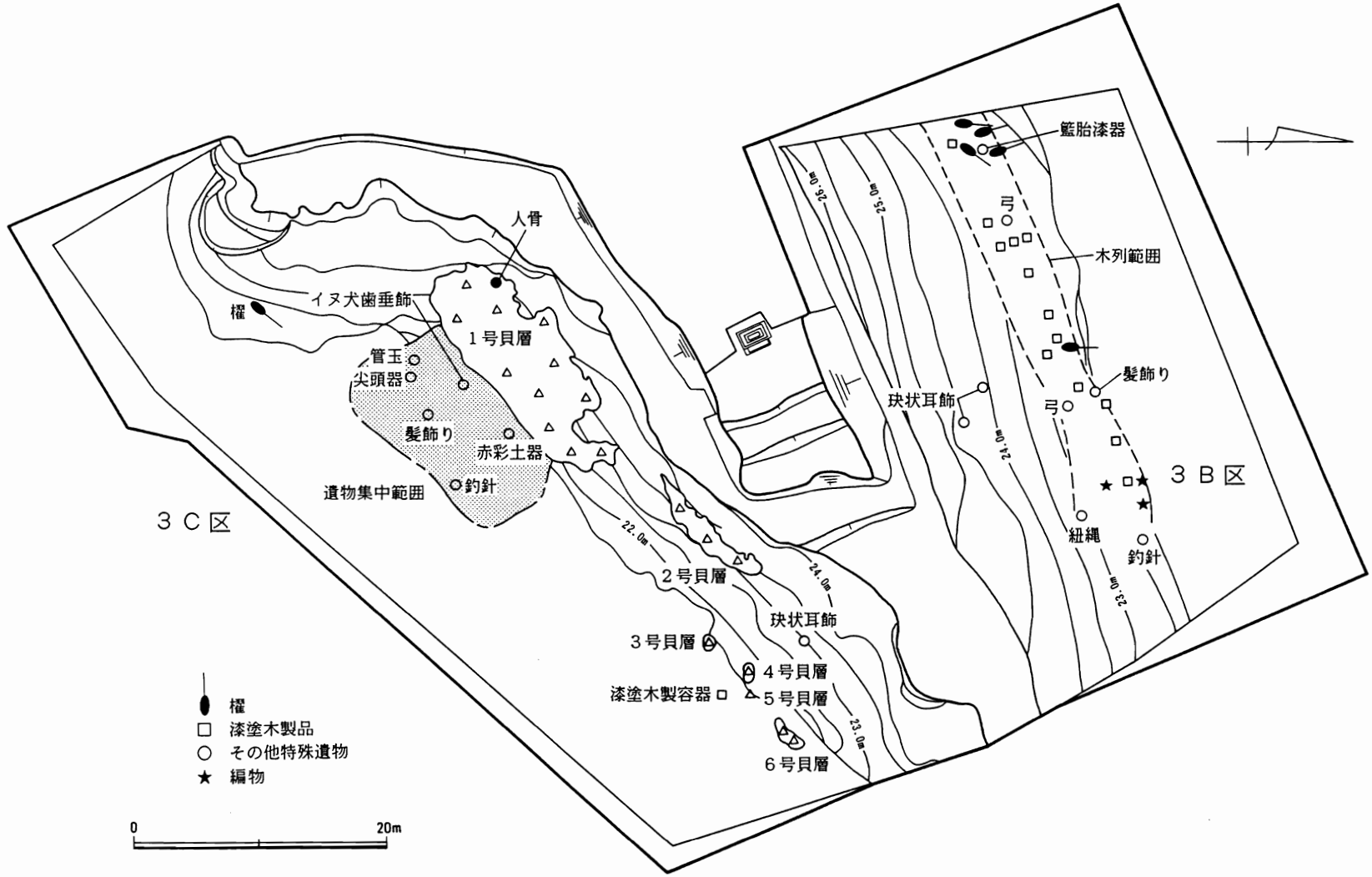
次に、多種多様な出土遺物についてみてゆきたい。まず、木製品では、黒・赤漆塗り木製容器類・櫂10点・丸木弓８点・樹皮巻き飾り弓２点・建築部材・板材などがあげられる。なかでも漆塗りの木製容器破片は、総数70点以上にのぼる。径５㎝大の破片が多いが、器形の分かる大型のものもあり、皿・鉢・椀など豊富なバリエーションが存在する。また、編んだ植物繊維を素材とし、赤漆を塗り重ねた籃胎様漆器の破片が出土している。類例は山形県押出遺跡に見られ、そこでは結歯式の櫛と推定されている。

編物は計３点出土した。１点は、巻き縁をもつ55×45㎝大の箕のような形態の編物である。１点は、桝網代編みによって多重菱形文が作り出されている（写真５）。また、泥岩ブロックに張り付くように検出された編物の上面からは、多量のミズキの種子が出土した。カゴ状の編物内に保存していた様子を示す好例であろう。

紐縄は６点検出された。特に泥岩ブロック層中より出土した撚紐製品は、太さ約1.5㎜ほどの精巧な撚紐を植物繊維の軸に密に巻き付け、それを長さ6.5㎝程のループ状にしたもので、漁撈具と関連する可能性がある。その他、釣針、髪飾りといった骨角器類も良好な状態で出土している。

出土土器群は、関山Ⅱ式から黒浜式古段階を主体とするが、東海地方の清水ノ上Ⅱ式および「上の坊式」土器が、地点によっては約４割という高率で在地の関山・黒浜式に伴出している点が大きな特徴である。

石器は大半が礫核石器類であることを特徴とし、石鏃・石匙等小型剥片石器の出土はきわめて稀である。礫核石器は、磨石・敲石・チョッパーが大多数を占め、それらと組み合わされて使用される石皿・台石も多く伴出している。石製装飾品



第2図　3B・3C区全測図および遺物分布図［1／500］

としては、玦状耳飾が２点出土している。

動植物遺体などの自然遺物も多量に検出された。動物遺体は、陸獣類・鳥類・海獣類・魚類が出土しており、本遺跡での多様な狩猟・漁労活動のあり方を伺うことができる。種別ごとに見てゆくと、陸獣類は、イノシシ・シカを主体とし、他にニホンザル・タヌキ・イヌなどが混じる。鳥類は、種類は未同定であるが、大小数種が含まれる。海獣類はイルカ類が多く、ウミガメ類もわずかに出土している。魚類は種類が豊富で、カツオが最も多く、イシナギ・サメ・マダイ・コブダイ・スズキ属・ハタ科などが少量見られる。植物遺体としては、クルミ・クリ・ドングリ類・ヒシが多くみられた。特に、調査区東寄りの9×2.5mに及ぶ範囲から、クルミが集積された層が検出された。

３Ｃ区

本地区からは、斜面貝層および遺物集中区が発見され、テン箱にして約300箱分の遺物が出土した。時期的には３Ｂ区とほぼ同じである。

断層崖の崖線ラインに沿って６地点の貝層が発見された。最も大きな１号貝層は、幅約8m、長さ20mの規模をもち、崖線が北側に入り込んだ凹地から検出された。貝層は、最も厚いところで50㎝程で、貝を含まない黒色土層を挟んで上層と下層とに分けられる。ダンベイキサゴ・ヤマトシジミが中心分布域を異にして堆積する。出土土器は関山Ⅱ式から黒浜式古段階のものおよび東海系の土器が目立つ。貝層中には、微小な魚骨類・堅果類などの動植物残滓の他、灰や焼土も廃棄されている。なお、１号貝層上面の北西端より、流出してしまった形ではあるが埋葬人骨の頭骨・上肢骨・肋骨等の各部位が検出された。出土状態より、屈葬されていた可能性が強いが、明瞭な掘り込み等は確認されなかった。２～６号貝層はそれぞれ小範囲の貝層であるが、ヤマトシジミを主体とし、ほぼ同一等高線上に分布する。

１号貝層南側下方の、南北8m、東西16mの範囲にわたる泥炭層中から遺物集中区が検出された（写真３）。１号貝層の上面に形成されており、時期的にもっとも新しい層序となる。遺物は、夥しい数の磨石・敲石などの礫核石器と共に、シカ・イノシシを主体とする多様な獣骨類が検出された。出土土器は黒浜式を主体とし、諸磯ａ式古段階の土器が少量混在する。

遺物集中区から出土した特殊遺物は、硬質頁岩製のポイント、管玉、赤彩された浅鉢形土器、漆塗りの土器、骨角製装身具（垂飾・髪飾り）などがあげられる。また、ヘラ状骨角器が数多く出土した。注目されるのが、磨石・敲石・石皿・台石類に混じって、イノシシ・シカを主体とする多量の獣骨と、骨を打ち割った際に出る細かな骨の破片が出土していることである。さらに、獣骨には明瞭な解体痕が観察されるものも多い。このような現象は、水辺の獣類の解体場という姿を彷彿とさせるものがある。

また、遺物集中区の直上には、焼けた木の実からなる厚さ20㎝の層が堆積しており、解体場として利用された後、堅果類の果皮が大量に投棄されたことが分かる。

本調査区からも、木製品が検出されており、赤・黒色漆塗り木製品の他に、丸木弓１点・櫂３点・笏状木製品２点などが出土した（写真４）。

４　まとめ

羽根尾貝塚と泥炭質遺物包含層は、縄文時代前期関山Ⅰ式から形成が開始され，関山Ⅱ・黒浜式期に隆盛を極め，諸磯ａ式期まで存続していたことが明らかとなった。

本遺跡は、縄文時代前期においては相模湾から入り込む細長い内湾に低く突き出す尾根地形先端部の斜面に立地していたものと推定される。そして、当時の水際に夥しい量の生活遺物が廃棄さ

れ、さらに獣・魚類の解体場として利用され、一時期貝塚が形成されたこと判明した。貝塚には完全ではないが埋葬人骨1体も遺されていた。また、東海系土器群の比率の高さや中部系土器群の存在には、当時の人間の文化交流を考えさせる小田原の地域的特性が伺われる。残念なことに生活遺構の痕跡は周辺の探索においても見出すことができず、今後の課題となるが、出土遺物の内容は、福井県鳥浜貝塚のあり方と比類されるものであり、漆塗木製品、漆塗土器、各種木製品、編籠類、紐縄類、骨角器、土器、石器、玉類など多種多様な文化遺物が得られた。加えて植物質・動物質自然遺物の夥しい出土状況には圧倒されるものがあり、相模湾岸地域の縄文前期における生活廃棄遺物の全てが遺存していたと言えるであろう。

発掘された直後の漆の赤は、縄文時代像を彩る象徴的な存在であった。まさに羽根尾貝塚は情報の宝庫と言えよう。現在，整理作業を継続中であり，徐々にその姿が明らかとなりつつある。考古学的分析とともに自然科学的分析による周辺の自然環境の復元など、遺跡解明へ向けて多角的な分析を行ってゆきたいと考えている。

文　献

八幡一郎・甲野　勇・中谷治宇二郎1925「神奈川県中郡旭村万田貝殻坂の石器時代遺跡」『人類学雑誌』40－5

甲野　勇1929「万田貝殻坂遺跡」『史前学雑誌』1－4

岡本　勇1974「西方貝塚の謎」『神奈川県史研究』23

山下勝年他1976「清水ノ上貝塚」『南知多町文化財調査報告書』第一集

原田昌幸他1996『縄文のタイムカプセル 押出遺跡』山形県うきたむ風土記の丘考古資料館

戸田哲也・舘　弘子1999「小田原市羽根尾貝塚と泥炭層遺跡の調査」『考古学ジャーナル』№450

写真1　3B・3C区全景［東から］

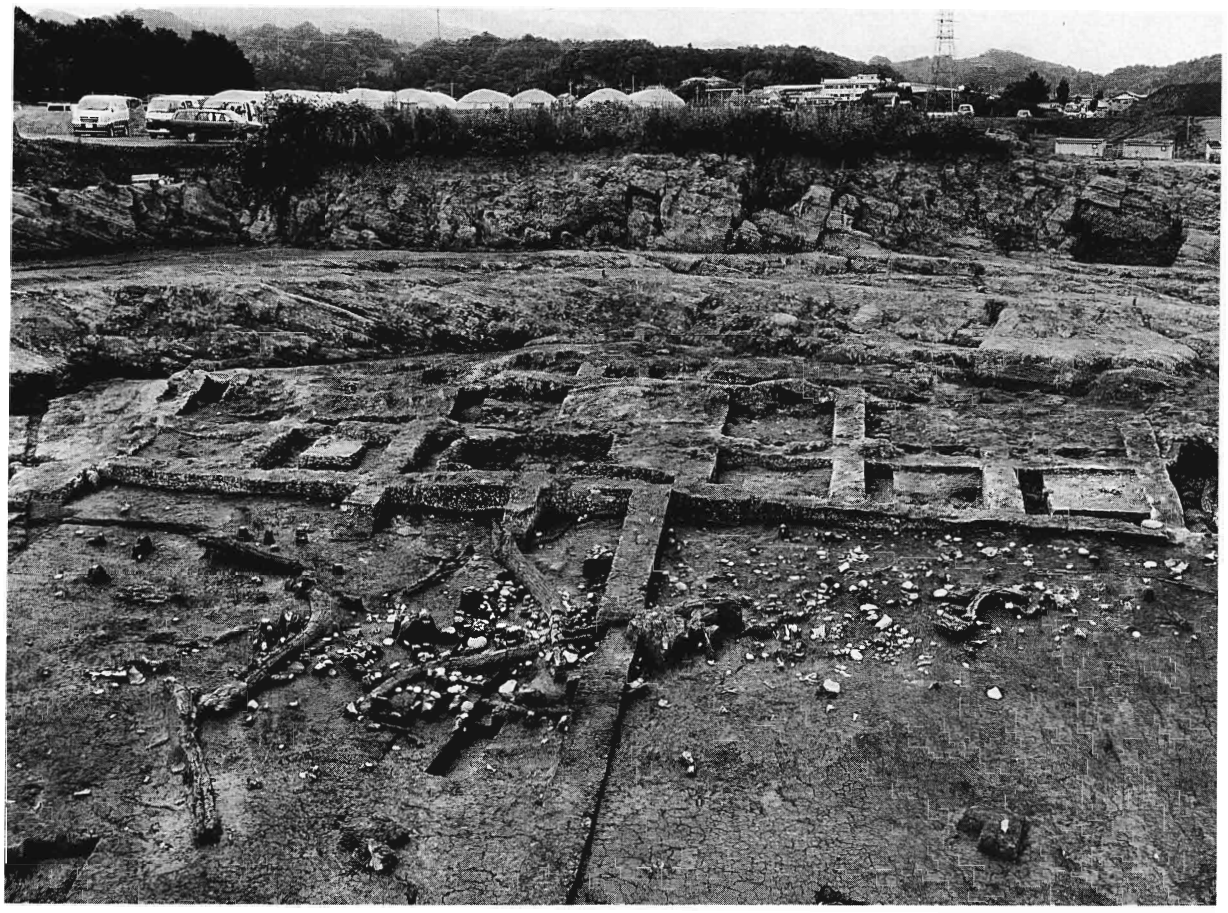


写真2　３Ｃ区１号貝層および遺物集中区全景［南から］

写真3　３Ｃ区遺物集中区検出状況［南東から］

写真4　3C区縄文時代前期櫂出土状態

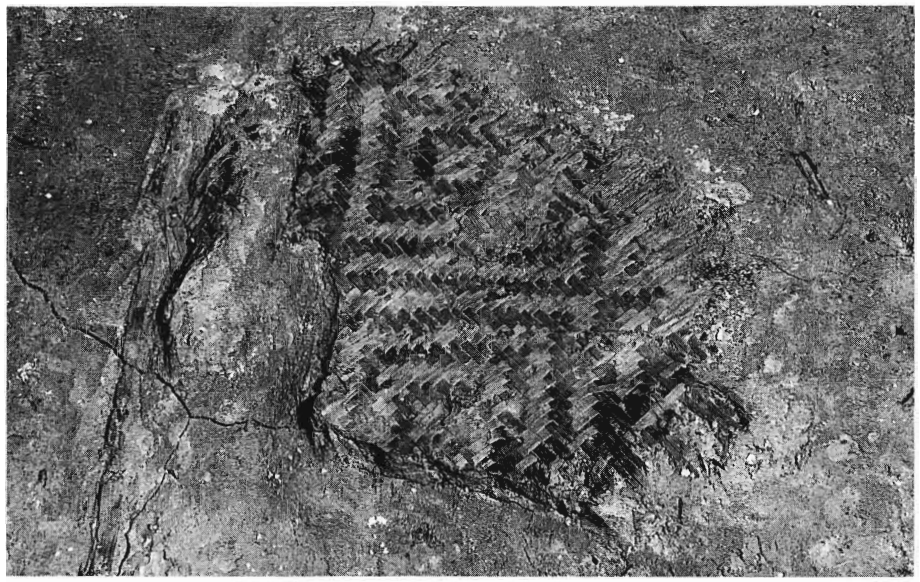


写真5　3B区多重菱形文編物出土状態

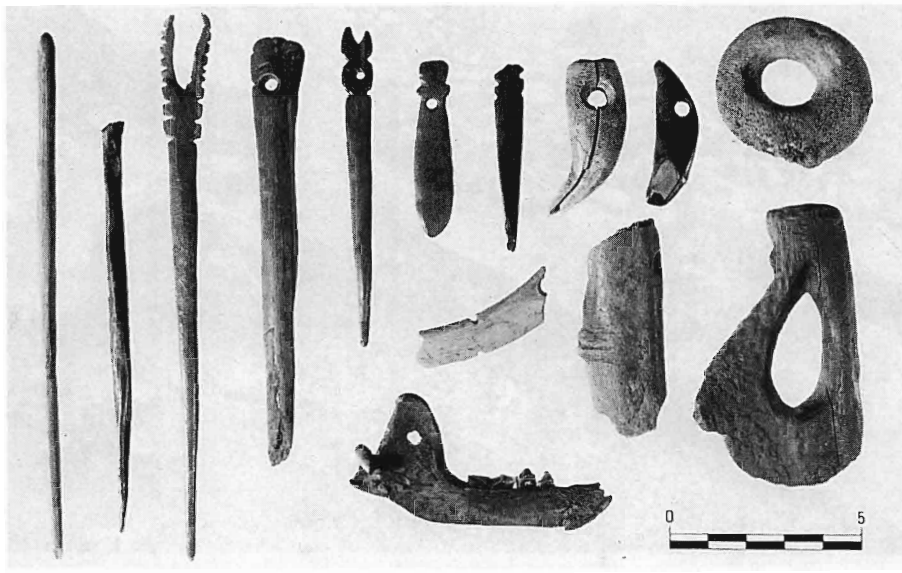


写真6　3B・3C区出土骨角制装身具ほか

綾瀬市　道場窪遺跡

矢島 國雄・小滝　勉

所 在 地　綾瀬市吉岡字北山 1643 - 1 外
調査機関　早川天神森遺跡発掘調査団
調査担当　矢島國雄・小滝　勉
調査目的　リサイクルプラザ建設に伴う緊急調査
調査期間　1998年10月12日～1999年3月31日
調査面積　約 1,580 ㎡

1　遺跡の立地

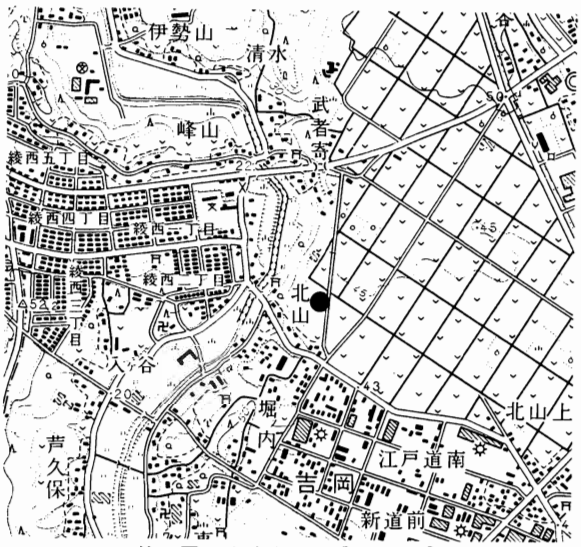
道場窪遺跡は、綾瀬市のほぼ中央に位置する市役所の南東約800ｍ、目久尻川東岸に広がる台地が、川に向かって緩やかに張り出した台地端部に位置する。調査地点は、崖線部から70～130ｍ程入りこんだ台地平端部で、標高は約43.5ｍを測る。

遺跡の北側約450ｍの地点には早川天神森遺跡が、さらに小支谷を挟んで北側約750ｍの地点には早川城跡が、また、南側約１kmの地点には吉岡遺跡群がそれぞれ立地している。

2　調査経緯

今回の調査は、市の公共施設であるリサイクルプラザ建設に伴う事前調査として実施した。

表土直下からは、道路状遺構１基、溝９条が検出された。これらの配置は、昭和30年代前半に行われた畑地灌漑事業に伴う耕地整理以前の耕地区画にほぼ合致しており、地境等の目的で機能していたものと思われる。宝永火山灰を覆土にもつ３条の溝は、近世以前に位置付けられるが、それ以外は覆土の状況から見て、近現代の所産であろう。現代のものとしては、この他に拳大の礫を敷き詰めた畑地灌漑事業の用水路基礎が検出されている。

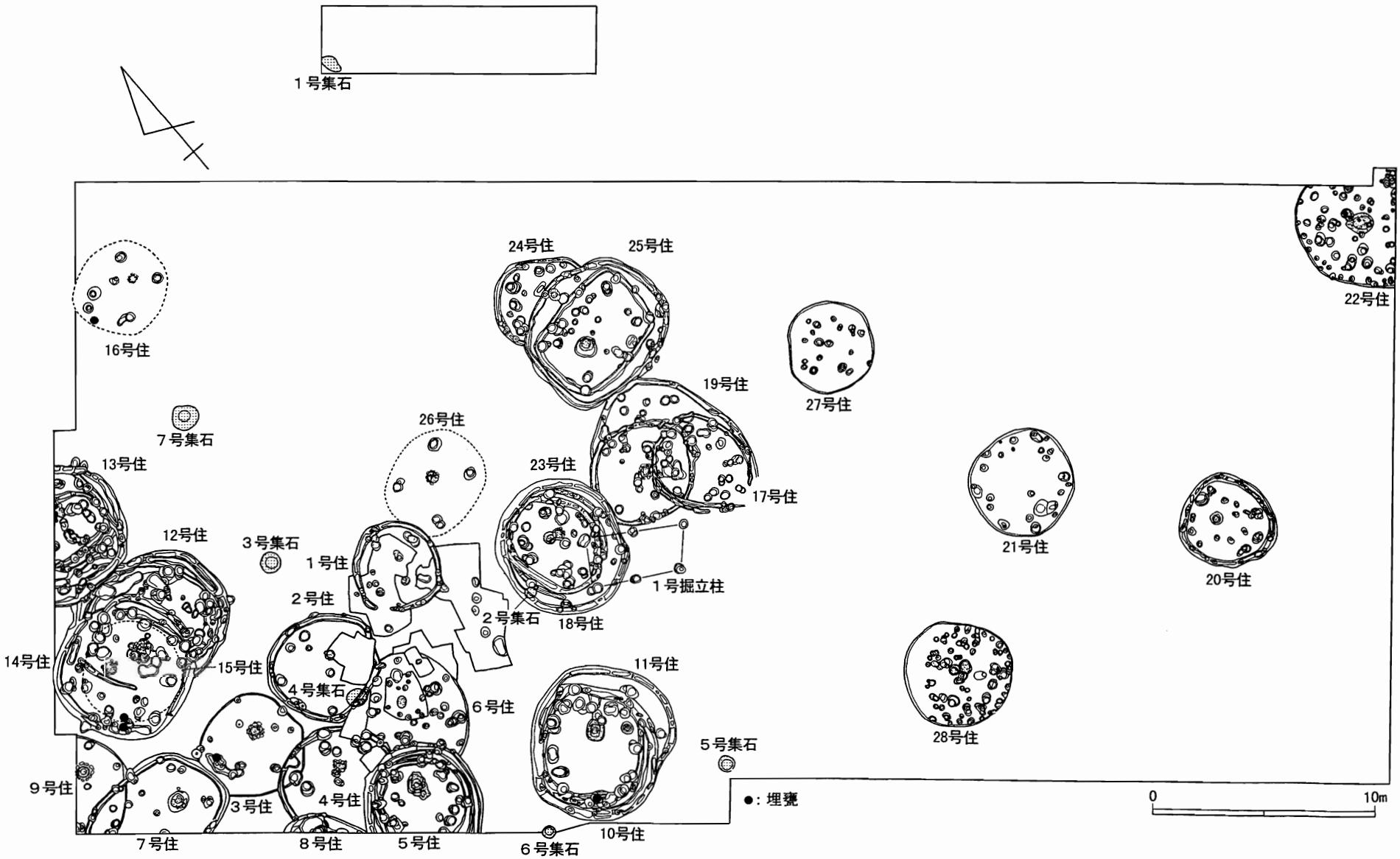


第１図　遺跡位置図［1:25,000］

中世～近現代遺構調査終了後、調査区を２ｍの小グリッドに分割し、縄文時代中期遺物包含層調査を人力にて行った。遺物包含層は、標準層位第Ⅳａ層とした層厚30～40㎝の層で、調査区内全面から多量の遺物が出土している。とりわけ、遺構の密集していた西半部からは夥しい量が出土した。遺構出土の遺物を含め、最終的な遺物量はテンバコで600箱を超えるものであった。

掘削が標準層位第Ⅳａ層中位～第Ⅳｂ層上面に到達した段階で、７基の集石が検出された。ほぼこの面が縄文時代中期における生活面と考えられるが、この面における住居址の確認は困難で、さらに第Ⅳｂ層下部まで掘削した結果、ようやく住居址の確認が可能となった。本来の生活面から20～30㎝掘り下げて住居址を確認しているため、掘りこみの浅い住居址については、壁を確認するに至らなかった。

最終的には、28軒の住居址、１棟の掘立柱建物址を確認・調査し、平成11年３月31日をもってすべての調査を終了した。



第2図　縄文時代中期遺構配置図

3　調査概要

今回の調査で検出された遺構については、調査経緯で概ね触れたので、ここでは、遺跡の主体である縄文時代中期の集落について、時期別に集落の変遷を追いながら概観していきたい。

勝坂期

勝坂期では、14軒の住居址が検出された。分布は調査区全体に及び、続く加曽利Ｅ期の分布が西側に偏在するのに比べ著しく異なる。こうした状況からすると、勝坂期は加曽利Ｅ期に比べ一回り大きい集落を形成していた可能性を指摘できよう。

炉の位置等から見て、入口は南から西にかけての方向に設けられている。立て替えは８軒で確認され、残る６軒は単独である。

勝坂式を６時期に細分した場合、古式の１・２段階の資料は包含層からは出土しているが、この段階に比定される住居址はなく、３段階以降の時期と考えられ、また、重複関係等から見て、少なくとも３～４段階の変遷が想定される。

加曽利ＥⅠ期

調査区西南部から３軒が検出された。勝坂期同様入口は南から西方向である。立て替えが行われた住居址は２軒で、埋甕を持つ住居址が１軒認められた。

この時期には曽利Ⅰ式が共伴するが、出土比率はほぼ拮抗している。

加曽利ＥⅡ期

調査区西半部から住居址５軒、掘立柱建物址１棟が検出された。分布はほぼ西半部全域に及び、入口はやはり南から西方向に設けられている。４軒で立て替えが行われており、埋甕は１軒のみ確認された。掘立柱建物址は今回の調査で唯一検出されたもので、規模は住居址とほぼ同一規模である。柱穴で囲まれた範囲内からは、炉址等の施設は検出されていない。

この時期は、曽利Ⅱ式が共伴し、量的には曽利式が増加傾向にある。出土土器の様相から見て、少なくとも２段階の変遷が想定される。

加曽利ＥⅢ期

調査区西端部から５軒が検出された。分布状況からは、より西側に偏在する傾向が顕著であり、入口は前段階同様南から西側に設けられている。立て替えは認められず、いずれも単独住居で、埋甕は２軒で確認された。

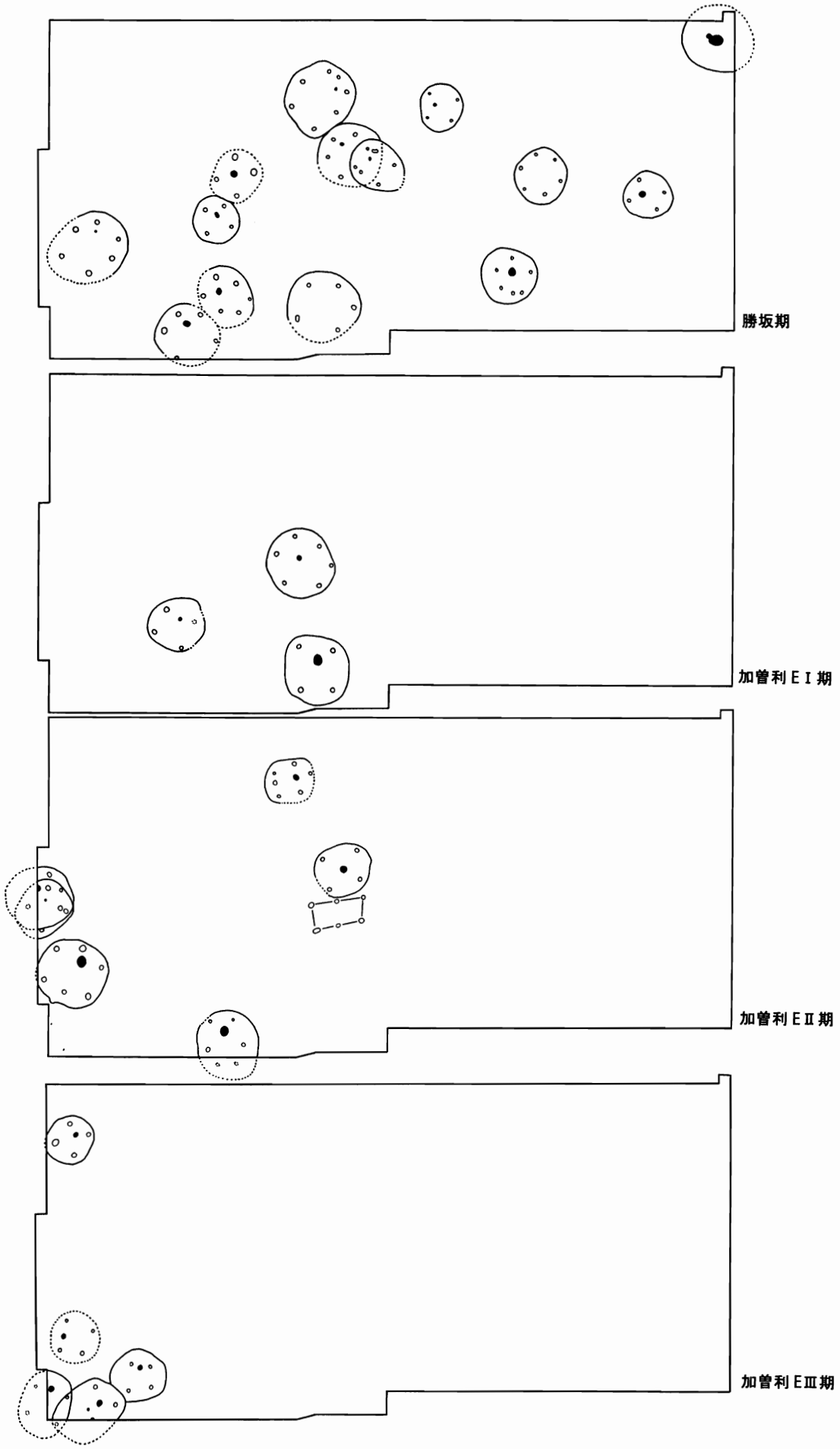
この時期は、曽利Ⅲ・Ⅳ式が共伴し、また、加曽利Ｅ式と曽利式との折衷土器の出土が量的にも顕著である。出土土器の様相や、重複関係等から少なくとも２段階の変遷が想定される。

この他、前述したように集石が７基検出されている。分布はほぼ加曽利ＥⅡ期と一致しており、この時期の所産である可能性が高い。

4　まとめ

道場窪遺跡の集落の範囲は、南北約200ｍ、東西約120ｍと推定され、今回の調査地点は、住居址の分布や、入口方向から見て、環状を呈すると考えられる集落の北東端にあたると見ることができる。時期別の住居址分布を見てみると、勝坂期では調査区全体に広がるが、加曽利Ｅ期では西側に偏在し、占地の違いが明白である。今後、遺物整理を通してより詳細な集落の変遷を明らかにしていきたい。

また、遺跡周辺には半径500ｍの範囲に、本遺跡を含め、早川天神森遺跡・早川城跡・(仮称)峯通遺跡と比較的規模の大きい中期集落が４ヶ所近接して立地している。小規模遺跡も含め、これら遺跡間相互の関連性の追求についても、今後の大きな課題といえよう。



第３図　時期別集落変遷図

逗子市　地蔵山遺跡群

—逗子市No.118遺跡を主体として—

土屋 浩美

所 在 地　逗子市桜山5丁目529番6地先

調査機関　逗子市地蔵山遺跡群発掘調査団
(団長：田代郁夫)

調査担当　土屋浩美

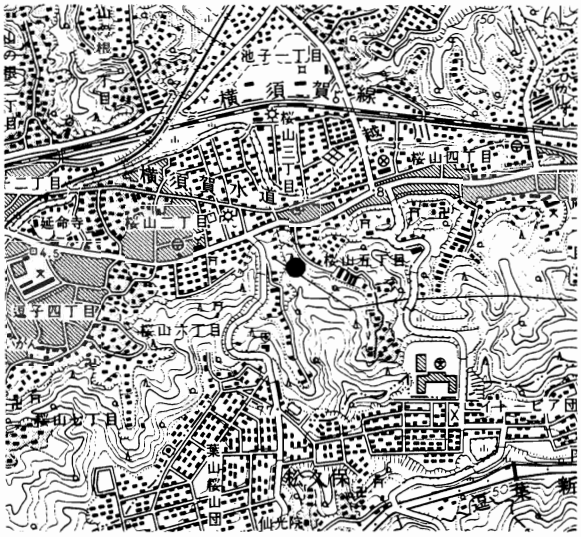
調査目的　共同住宅建設に伴う事前調査

調査期間　1999年7月14日～2000年2月29日

調査面積　約4,500㎡

1　遺跡の立地

地蔵山遺跡群は、JR横須賀線東逗子駅の南西1kmに位置する(第1図)。逗子市は相模湾に面した三浦半島の付け根に位置している。市域の地形を見ると、中央部を東西に流れる田越川が沖積低地を形成しながら、相模湾に注いでいる。この低地を南北から挟むように三浦丘陵が展開している。遺跡地は、この逗子市南部を東西に走る丘陵から南北方向に別れた支丘陵のうちの、地蔵山と通称される尾根部に位置している。この尾根部は丘陵頂部に断片的に緩斜面を持っており、遺跡地はこの平坦地に立地している。すなわち、頂稜直下の平坦面にNo.118地点が、尾根中腹にNo.119地点、支尾根末端にNo.29・No.117地点が存在する(第2図)。このうちNo.117地点とNo.29地点は、丘陵先端部ふもとの旧矢部邸内にあたり、No.117地点は矢部家に連なる屋敷跡が存在した場所であると考えられていた。またNo.29地点は、以前「矢部四郎様」と呼ばれる塚があった場所である。そしてNo.118地点は尾根上の地すべりによって形成された平場で、標高約38mのこの地からは田越川流域の市街地が望める。また尾根東面中腹のNo.119地点は同じく地すべりによって形成された緩斜面で、



第1図　遺跡位置図［1:25,000］

この地には熊野神社が奉られていた。

逗子の谷戸を含めた丘陵端部一帯には、本遺跡以外にも多くの遺跡が確認されている。本遺跡から谷戸を隔てた東側の丘陵端部には持田遺跡があり、弥生時代中期から平安時代に至る集落址が発見されている。また東方1.5kmの台地には沼間ポンプ場南台地遺跡があり、縄文時代及び古墳・奈良・平安時代の遺構が発見されている。また、遺跡地北方を東西に流れる田越川を挟んだ池子地域の米軍住宅地には、池子遺跡群があり、弥生時代から近世以降に亘る遺構が見つかっている。また、最近では池子遺跡群に隣接する池子桟敷戸遺跡においても、調査が行われ、弥生時代から近世以降に亘る遺構が検出されており、このうち弥生時代中期後半を中心とした方形周溝墓群が15基検出されている。さらに遺跡地南西1kmの丘陵上では昨年長柄・桜山第1号墳が発見されている。このように、逗子南部の沼間・桜山地域の丘陵端部

には弥生時代から古墳時代を中心とする遺跡が点在していることから、本遺跡においても該期の遺跡が包蔵されている可能性が高いことは当然予想された。

2　調査経緯

調査は、逗子市桜山５丁目に計画されている宅地開発計画に先行して行われた。本来この開発区域は、僅かに地蔵山矢部邸内塚(逗子市No.29)１箇所が遺跡として認知されているのみで、その大半は埋蔵文化財包蔵地外であった。しかし、現況の地形や周辺の遺跡分布等から見て、未周知の遺跡が存在する可能性が考えられたので、逗子市教育委員会によって平成10年8月24日から10月13日まで、埋蔵文化財範囲確認調査が行われた。その結果、地蔵山矢部邸内塚(逗子市No.29)のほか、新たに３地点で遺跡の存在が確認され、それぞれ地蔵山遺跡(逗子市No.117遺跡)・逗子市No.118遺跡・地蔵山熊野神社遺跡(逗子市No.119)として周知された。

以上の範囲確認調査の結果を踏まえ、逗子市教育委員会と事業者との間で本調査実施について協議が行われ、事業者から委託を受けた地蔵山遺跡発掘調査団（団長：田代郁夫）が、上記４箇所の遺跡について、平成11年7月14日から発掘調査を行うこととなった。調査作業は、まず各遺跡の樹木及び下草の伐採作業を行い、その後順次表土掘削作業に入った。表土掘削については基本的には重機を使用したが、地形的に重機の使用が困難であったNo.29地点とNo.119地点については人力で掘削を行った。表土掘削終了後、順次各地点の遺構調査に入り、翌12年2月29日すべての調査を終了した。全調査面積は約4,500㎡である。

第２図　調査区位置図［１／3,000］

3　調査概要

地蔵山遺跡(逗子市No.117遺跡)

本地点は丘陵末端部の小鞍部に位置する。岩盤のほぼ直上において火葬址１基が検出された。火葬址は長軸98㎝、短軸69㎝を測る、やや不整な楕円状を呈している。深さは最大で24㎝を測る。遺物が出土していないため、詳細な帰属時期は判別できないが、本調査地点に隣接したNo.29遺跡で検出されている焼骨と密接に関連するものと推測されることから中世後半が想定できる。

地蔵山矢部邸内塚（No.29）

本地点もNo.117地点と同様に

第3図　No.118遺跡調査区全体図［1／350］

丘陵末端部の小鞍部に位置する。本遺跡には平成10年１月まで1.5ｍ程度の塚の上に五輪搭四基の断碑と宝篋印搭一基の断碑が存在し、「矢部四郎様」と呼ばれていた。本地点では、３つの面より土坑27基、ピット33穴、段状遺構１基が検出された。土坑からは焼骨が検出されたことから、当該地は中世から現代まで、埋葬又は葬送に関連する場として継続的に使用されてきたものと推測される。

地蔵山熊野神社遺跡（No.119）

本地点は丘陵中腹の緩斜面に位置する。当該地には平成11年まで伊弉那岐命・伊弉那美命を祀る「番合谷熊野神社」が存在していた。本地点からは３つの面より土坑22基、ピット85穴、溝２条、掘立柱建物址１棟、段状遺構５基、地下式坑１基が検出された。本址では、中世後期から近世にかけての土地利用の変化と、神社の現代までの存続を窺い知ることができた。

逗子市No.118 遺跡

本地点は総調査面積が約3,500㎡にも及ぶため、排土置き場確保などのために調査対象地区を4区分し、便宜上Ⅰ区A･B、Ⅱ区A･Bと呼称することとした。したがって発掘作業はⅠ区Aから行い、順次Ⅰ区B・Ⅱ区A･Bと調査を進めた。また測量の便宜を図るため、全調査区域を網羅する５ｍ方眼のグリッドを設定した。このグリッドは国家座標に準じたもので、南北方向のラインにはアルファベットを、東西方向のラインには算用数字を付し、グリッド呼称は北西を基点とすることとした。

調査に際してまず、全調査区域の樹木の伐採を行った後、Ⅰ区Aより約20cmほど堆積する表土を除去したところ、岩盤上に掘りこまれた遺構群が確認された。ただし、Ⅰ区Bでは表土下に古墳時代前期の遺物包含層(黒褐色土)が確認されたため、この堆積層の調査を行った後に、下層の弥生時代後期の竪穴住居址群の調査に入った。またⅡ区では岩盤･ローム層を切り込む形で地山とする竪穴住居址群が検出された。

調査の結果、弥生時代後期から近世以降に亘る遺構が検出された。すなわち、弥生時代後期では竪穴住居址約90軒・溝状遺構1条、古墳時代前期では竪穴住居址約６軒･溝状遺構２条、古墳時代中期では竪穴住居址約２軒、古墳時代後期では竪穴住居址約４軒・土坑12基を検出した。また、中世では地下式坑２基・段切り状遺構･溝状遺構１条、近世以降では溝状遺構２条・掘立柱建物1軒を検出した。

写真１　No.118地点Ⅰ区住居址群［東から］

これらの遺構について、時代ごとに以下に若干の説明を加えたい。

弥生時代後期

今回の調査では、約90軒の竪穴住居址が確認された。これらの住居址は、E～Ⅰ-4～10グリッドの暗褐色土を地山とする部分とF～K-11～18グリッドのローム層を地山とする部分に特に集中している。いずれの住居址も重複

が激しく、また数回の拡張が認められるものも検出されている。検出された竪穴住居址の構造は、平面形は楕円形から隅丸方形を呈し、周溝と４本の柱、入り口の梯子穴を持つ。炉址は地床式で一部に石囲式のものが認められた。

写真２　No.118地点Ⅱ区住居址群［東から］

出土遺物は台付甕、壺、高坏、鉢などを主体とするが、いずれの住居址も切り合いが激しい上に、上部の削平が激しく、帰属の不明瞭なものも存在する。このほかわずかではあるが、有頭石錘、石斧などの石器も出土している。これらの出土遺物から、住居址の帰属時期は弥生後期後半が主体ではないかと考えられる。

古墳時代前期

古墳時代前期に属する遺構としては、竪穴住居址約６軒(4･5･20･22･71･75号住など)･溝状遺構２条(4･11号溝)が検出された。住居址は弥生時代の遺構を切って構築されているが、軒数的には前代に比べ非常に少ない。これらの竪穴住居址の構造は、弥生時代のものに比べて方形に近く、４本の柱を持つ。規模は一辺６ｍのものが主体的であるが、75号住居址は一辺約10ｍもあり非常に大型のものであった。２本検出された溝状遺構はほぼ平行しており、幅、断面形、覆土のいずれも酷似している。

これらの遺構からは甕･高坏･坏･小型壷などの土師器が出土しており、4･5号住居址では覆土下層からＳ字状口縁甕などが出土している。

また遺構に伴うものではないが、Ⅰ区ＢのＥ～Ｊ-４～８グリッド付近において、弥生時代後期の遺構を覆うように厚さ20～30cmほどの遺物包含層(黒褐色土)が確認された。この黒褐色土層は非常に粘性に富んでおり、湿地性の堆積層と推測される。本層中からは古墳時代前期を主体とする遺物が大量に出土しており、特にＨ～Ｊ-４グリッドでは約220点もの遺物が出土した。このなかにはミニチュア土器１点･手捏ね土器１点･滑石製勾玉１点･碧玉製管玉１点が含まれる。

古墳時代中期

古墳時代中期に属する遺構は、竪穴住居址約２軒(61･84号住など)のみである。前期のものと同様に弥生時代の住居址を切って構築されている。これらの竪穴住居址の形態は前期のものとほとんど変わらない。

古墳時代後期

古墳時代後期に属する遺構としては竪穴住居址約４軒(80･81･88･94号住など)が検出された。これらの竪穴住居址の平面形は方形で、４本の柱を持つ。床面は岩盤上に暗褐色土を貼って構成されている。また80号住居址では住居址北隅部に竈が設けられていた。

これらの住居址からは須恵器坏･土師器坏などが出土している。

中世

中世に帰属するものでは、調査区西壁際において地下式坑２基・段切り状遺構･溝状遺構１条(３号溝)が検出された。溝状遺構は段切り状遺構に平行しているため、これに付随するものと考えら

れる。また2基の地下式坑については岩盤及びシルト層を掘りこんで構築されており、形態はほとんど同一である。

出土遺物のうち、1号地下式坑の覆土中からは北宋銭の熙寧元宝(1068年初鋳)が出土している。

4　まとめ

今回の調査では、弥生時代から近代までの遺構が発見された。このうち、弥生時代後期から古墳時代始め頃までを主体とする集落遺跡が検出されたNo.118地点の調査成果を持ってまとめに変えたい。

No.118地点において、遺跡の中心となるものは弥生時代後期から古墳時代後期までの竪穴住居址群で、約100軒が検出されている。このうちの約90軒あまりは弥生時代後期後半から古墳時代初頭に帰属するものである。

以上のような調査成果により、このNo.118遺跡はであることがわかった。この遺跡の地形を考えると、竪穴住居址群は丘陵上の僅かな平坦面を選んで作られたものであり、今回の調査ではその集落の主体部は概ね調査することができたものと思われる。ただし、これらの竪穴住居址のほとんどが重複していることから、同時期に存在していた住居は十数軒程度と推測される。そして概期の人々は、限られた平場を使って何回も建て替えを繰り返して居住していたことが想像できよう。

出土遺物については、弥生時代後期後半のものを主体とし、それ以前の時期に帰属する土器は見られないことから、本遺跡における集落の出現時期は弥生時後期からと考えられよう。

古墳時代に入ると、住居址は僅か数軒となり、集落としての規模は極小さいものとなる。このなかで、一辺約10mの大型住居址(75号住居址)は構造的には普通の住居址と変わらないが、遺跡地の最も見晴らしのよい場所に構築されており、今後概期における同規模の大型住居址の類例等を検証していきたい。また、Ⅰ区Bにおいて確認された遺物包含層(黒褐色土)については湿地性の堆積層と推測されることから、古墳時代前期頃には、Ⅰ区B付近は水の影響を受ける沢のような状態になっていたと考えられる。本層中からは大量の破片遺物が出土しており、この沢に廃棄したかのような状況が窺える。ただし、出土遺物の中には手捏ね土器、大型管玉、勾玉等も出土していることから、単なる廃棄遺物とは一概には言えず、特に玉類については遺跡地南西の長柄・桜山古墳との関連性についても想定できよう。

本地点も含めて、逗子市南側の丘陵縁辺部には弥生時代後期の集落址が集中している。特に、本遺跡地東側の尾根部には、弥生時代中期から平安時代に至る集落址が発見されている持田遺跡が存在しており、同様に丘陵端部に発見された本遺跡との関連性は非常に深いものと考えられよう。現在、報告書作成に向けて遺物整理作業中であり、このなかで各住居址のより詳細な年代を出すことにより、今回発見された集落の変遷を明らかにしていきたい。

本遺跡群の地形と地質に関しては、神奈川県立七里ガ浜高校の上本進二氏にご教示頂いた。

寒川町　高田遺跡

―方形周溝墓について―

中村 喜代重

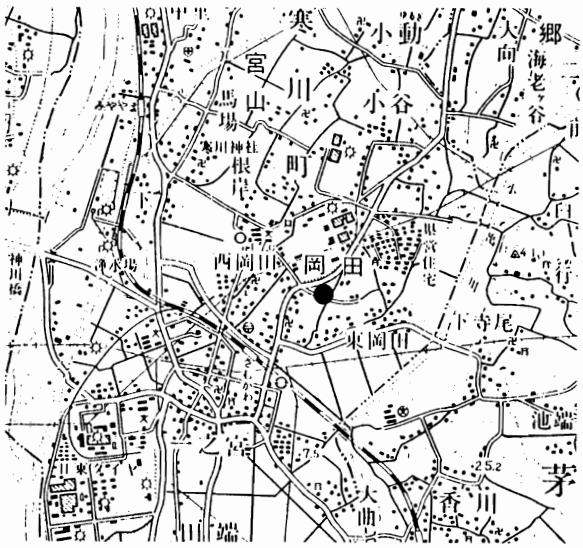
所 在 地　寒川町岡田五丁目2730-1
調査機関　高田遺跡発掘調査団
調査担当　中村喜代重
調査目的　宅地造成
調査期間　1999年2月8日～5月12日
調査面積　443㎡

1　遺跡の立地

遺跡はJR相模線寒川駅の北東600mに位置して、丹沢山系を眺める西側に目久尻川の流れに沿った沖積面と、東側の小出川の流れに沿った沖積面に挟まれた舌状地形の標高約21mを測る地形区分での相模面の台地上に立地している。

もとより、相模川の河岸段丘として発達した地形区分の相模原面は、その名称にあわせた広々と平坦面の広がる相模原市とこれに接した大和市・綾瀬市等の地形面を連想するかと思う。

一口に相模原面と言っても、北端面での標高は約120m近くあり、本遺跡付近に至っては30mを切っている。この比高差からすれば、何故同じ地形面なのかという疑問も生まれよう。しかるに、本遺跡の立地は相模原面の台地上とするが、これを説明すると氷河期に遡る生い立ちを言わなければならない。寒川町や茅ヶ崎市は海に近いという見地にあれば、本遺跡が弥生時代遺跡という点とその生産性の意味から、目久尻川の流れる水田可耕地の低地と、同じく小出川の低地に挟まれた舌状地形の小高い台地上に立地するとした方が、より理解できるかと思う。



第1図　遺跡位置図［1:25,000］

2　調査経緯

本遺跡は、3階建集合住宅の建設を目的とした開発事業の許可申請に端を発し、造成工事による遺跡破壊に先立ち実施された文化財保護法に基づく事前調査である。

本遺跡の近隣には寒川町教育委員会による高田遺跡（環壕）および岡田遺跡（縄文中期大規模集落）の調査事例があり、これをもとに実施された教育委員会の確認調査（建物範囲に2×2mの試掘グリッド2箇所を設定、うち1箇所において粗粒スコリアを含む遺構覆土を発見）によって遺跡の存在が確認された。これをもって、原因者に対する行政指導から発掘調査に至っている。

ちなみに、調査確認による粗粒スコリアを含んだ覆土をもつ遺構は、弥生時代後期に帰属する方形周溝墓の一部であった。本遺跡は基本的には住居址が密に重複する集落跡であり、その後、方形周囲溝墓が築かれたものである。

3　調査概要　―弥生時代―

高田遺跡の発掘調査によって確認された遺跡の時代区分は弥生時代の後期に帰属し、その性格は集落跡である。この時期以外に見る遺構は中世に相当する２基の土坑があるのみで、その他の遺構・遺物は全く発見されていない。そして、その内訳は次の通りである。

住居址

逐次発見された竪穴住居址は総数23軒に達した。平面形態にあっては円形・楕円形・隅丸方形・隅丸長方形等があり、比較的バラエティーに富んでいる。

また、各住居址から出土した土器の大半は、西遠江に指標を置いている後期前半・山中系土器群によって構成される。

一方、竪穴住居址以外の遺構として掘立柱建物址１棟の発見がある。この掘立柱建物址は遺構全体図（第２図）に示した通り、主として第６号住居址と重複関係をもっている。住居址の床面を掘立柱建物址の柱穴が切っていることから、住居址よりは新しいということになる。そこで具体的な時期と言うことになると、各竪穴住居址が著しい重複関係にあることから、同時期の範疇とも考えられもするが、確実なことは不明である。

また、この掘立柱建物址は方形周溝墓とも重複関係があり、現時点では方形周溝墓より先行するものと考えている。

方形周溝墓

本調査でもっとも大きな成果が方形周溝墓の発見である。弥生時代における方形周溝墓の発見は特に珍しいことでもなんでもないが、周溝内から出土した後期後半の土器群に着目されたい。出土した土器のうち、立花　実氏の協力によって一部資料の実測図を掲載することができた。ここに感謝申し上げる次第である。

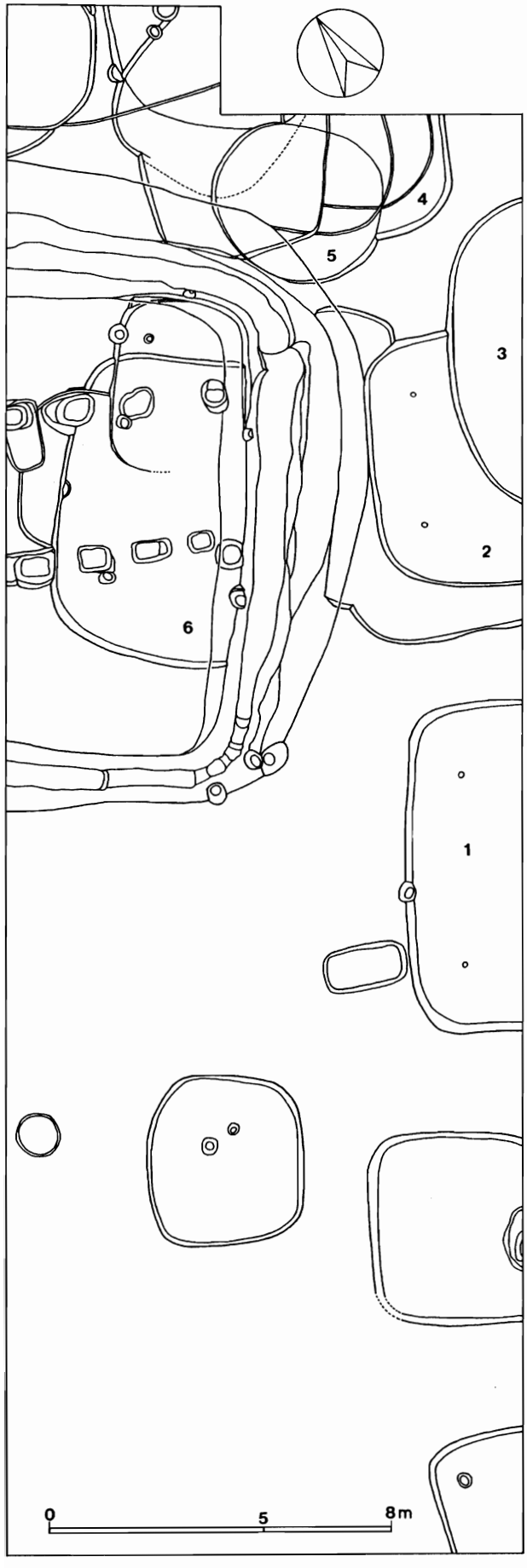
さて、出土土器もさることながら、特に珍しい訳でもないが、遺構の構築に関して概要を触れておこうと思う。

まず、方形周溝墓の発掘状況は、掲載した実測図（第3図）を見て分るように、全体を検出したものではない。残る部分は調査区外に遺存している。主軸方位は北東―南西にあり、その南東側の約半分について発掘したことになる。規模は外法（そとのり）で約15m、内法では10.5mを測る。

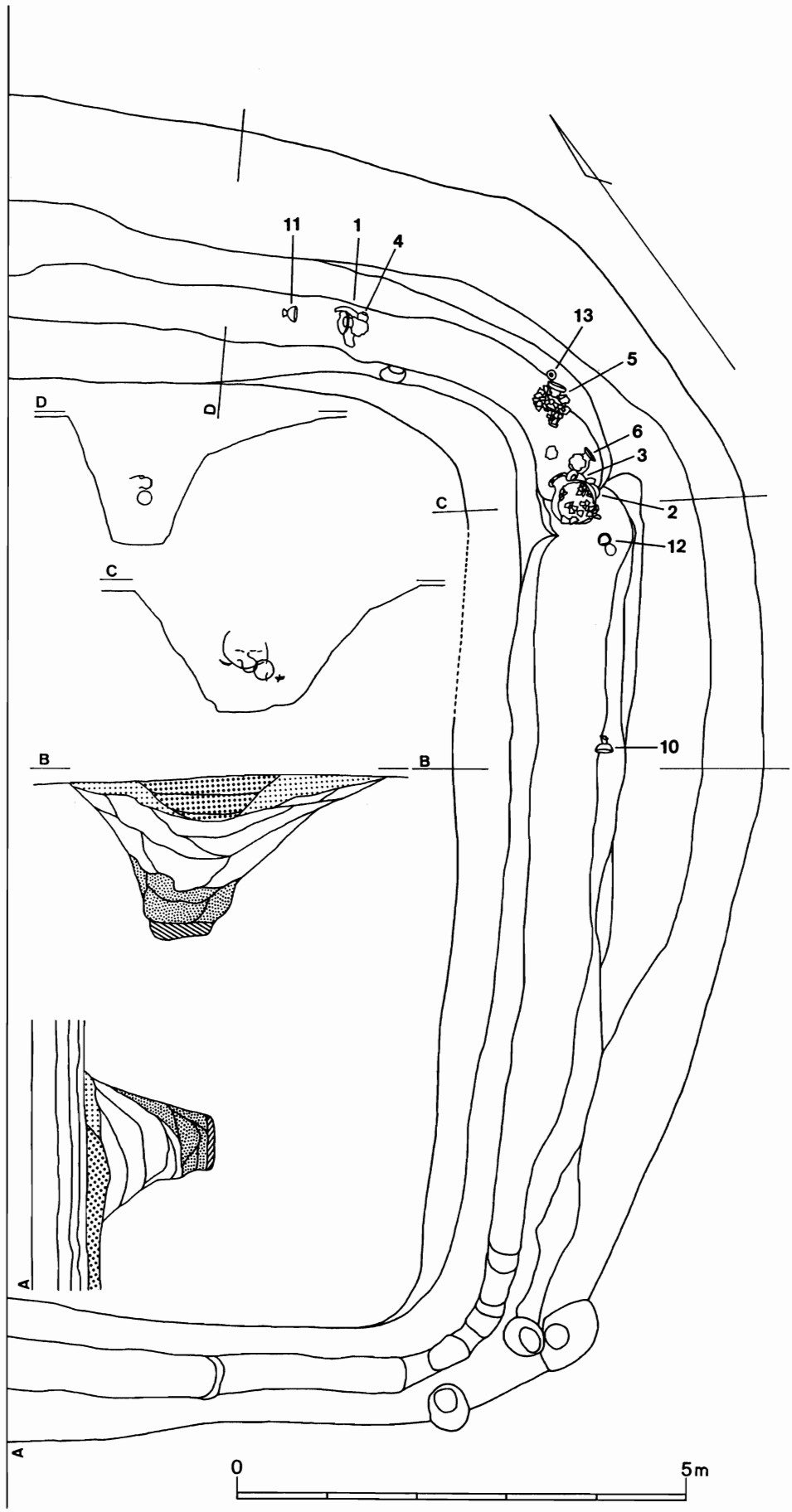
四方をめぐる溝のうち、全形を知り得るのは一辺のみであるが、これは中央部が深く、両端はせりあがり、舟底様に掘りくぼめられている。そして周溝には掘り方が認められる。土層断面図（第3図）のA・Bで溝底にあたる斜線部分の土層は、底面の整形事業を施して埋め戻されたものである。ちなみに、周溝の断面形は薬研堀（やげん）の形である。

次に周溝の埋没についてふれる。遺構が機能を開始してからその機能を終えるまでの過程を土層断面図（第3図）A・Bは示してくれる。この図で上面にあたる粗い網目部分は粗粒のスコリア層（一次相テフラ）、底面に近くの細かい網目部分の土層は、白抜き部分の層が形成されるまでの間、遺構がまだ機能中であることを示す層相の堆積覆土である。断面C・Dから明らかなように、出土土器の大半は、この埋没土の上面に遺存していたのである。

さらに興味深いことは、機能中の埋没を示す層の堆積以後、周溝は埋没終了までの過程を辿ることになる。そしてその堆積は、遺構の内側から外側へ中心軸をずらしてゆく。しかも堆積土は内側から外側へと流れ込んだ状況を示している。これに粗粒スコリアの堆積は遺構外へとオーバーフローしている。これらの現象は、ひとつに高塚様のマウンドの存在を伝える条件かと思われる。また、遺構南隅のコーナー部分に三つのピットがある。うち二つは底面を突き固めてあり、通用ブリッジの存在を伺わせる。　（中村喜代重）



第２図　高田遺跡遺構全体図［1:150］



第3図　方形周溝墓実測図［1:70］

4　出土土器とその評価

前記した方形周溝墓からは数々の土器が出土した。それらは現在整理中であるが、今回その主要なものを図示することができた（第4～6図）。その内容は、壺6個体、甕3個体、高坏2個体、鉢2個体である。このほか、大型の壺1個体と口縁から胴部が完存する甕1個体が確認されている。これらの土器は全て周溝から出土し、その中でも一部の上層出土土器を除き、概ね中層から出土している。特に北東コーナー付近の覆土中層からは、多くの土器がまとまって出土している（第3図）。

これらの土器は遺存状態が良好であり、甕の脚台部のみというものを除き（方形周溝墓ではこうした出土例にも意味がある）、それぞれがほぼ完形に復元された。口縁部の一部を欠くといった人為的な打ち欠きの可能性を残す例もあるが、胴部、底部に関しては、打ち欠き、穿孔等は見られない。

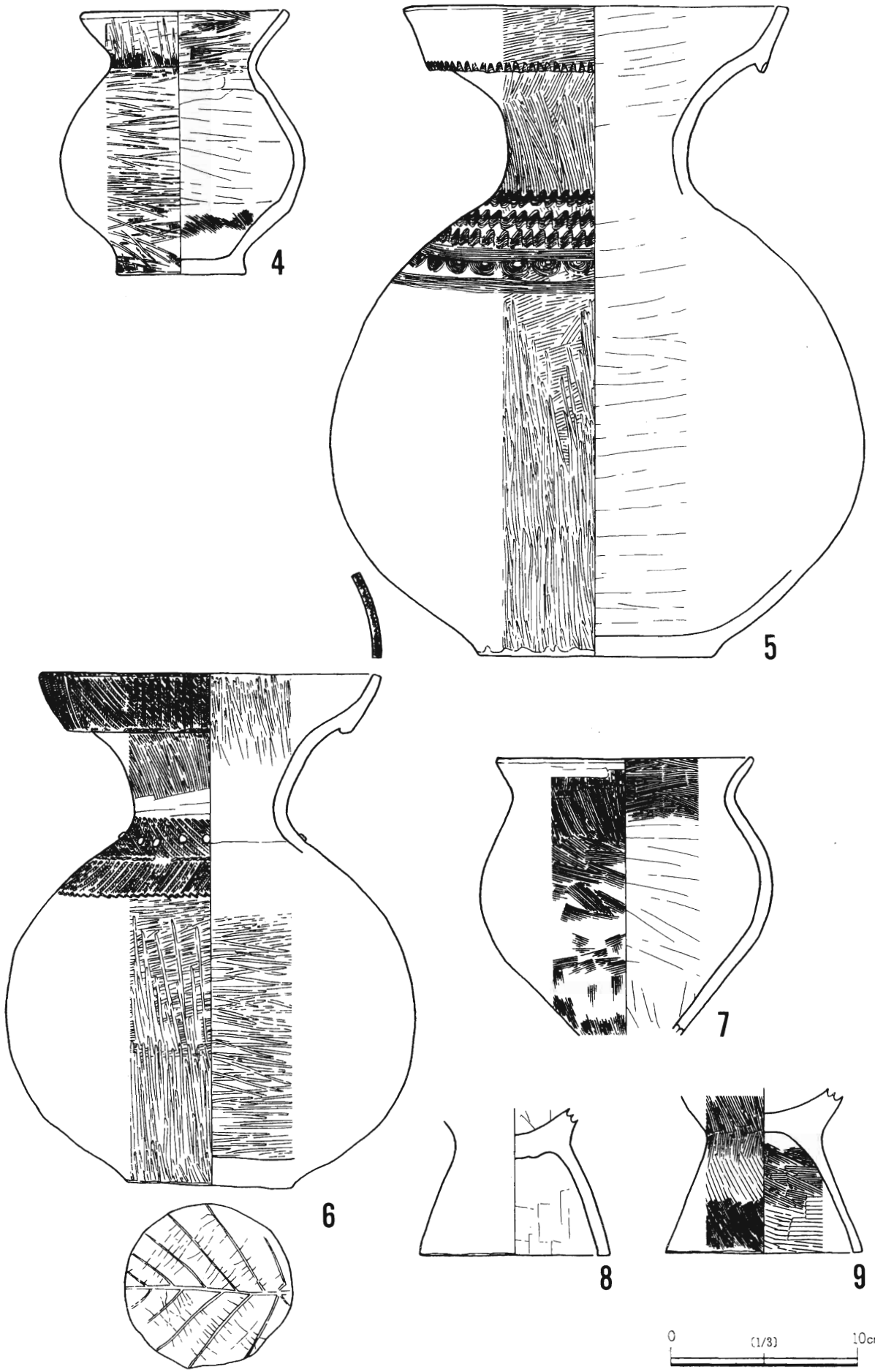
土器そのものにも特徴が見られる。壺には複合口縁・折返口縁・単純口縁があるが、それらの多くに西遠江の影響を見ることができる。内彎気味に立ち上がる単純口縁（2）、櫛描文（3・5）、端末結節縄文とハケ刺突の組み合わせ（6）、頸部のナデ（3・6）等にそれが見受けられる。一方、S字結節文を多段に用い、東京湾岸の特徴を有している壺（1）も、羽状縄文には端末結節縄文を使用しており、東西の文様が合わさった形となっている。甕には口唇部をヨコナデで仕上げたもの（7）と、ナデ調整（8）、ハケ調整（9）の脚台部がある。既にヨコナデが採用されている点と、ハケとナデの2種類の調整方法が混在している点に注目したい。また、図示できなかったもうひとつの甕は全面ハケ調整、口唇部面取り、その端面下端にキザミが入れられるものである。2個体の高坏はいずれも口唇部に内傾面をもつ深い坏部と内彎する脚部を有す（10・11）。鉢は、壺の製作途中のような形態に片口をつけたもの（12）と小型、平底のもの（13）がある。当時の在地の主要土器組成に鉢は含まれないことから、これらの土器の存在も外来的な要素と考えられる。しばしば古墳時代の土器と混同されるもの（13）も、以上のような土器群とセットをなすものである。

以上の特徴から、これらの土器は西遠江の弥生時代後期後半の土器である欠山式の影響を強く受けていると言える。特に、壺（3）、高坏（10）、鉢（13）は、見よう見まねでは作れないほどの出来である。西遠江と直接、またはそれに近い形での交流があったことを想像させる。

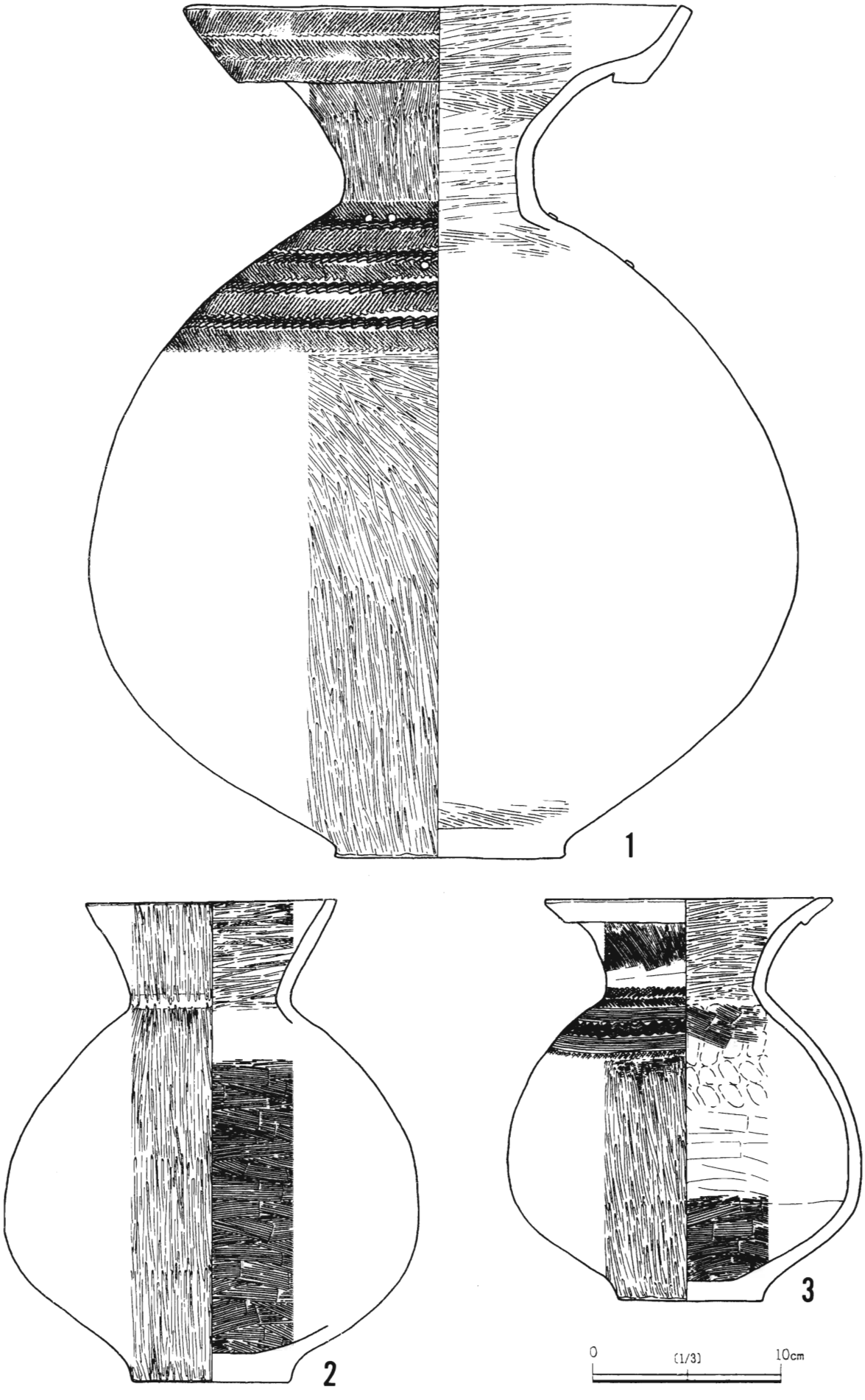
また当地域では、後期後半の方形周溝墓からは焼成後底部穿孔の壺が出土することが一般的であるが、それが見られない点も、単に土器だけではなく、その使い方までもが西遠江的であると言える。人の移動を想定する根拠となろう。

さらに、この方形周溝墓の方台部下から見つかった6号住居址からは、伊場式新段階（西遠江の山中様式）の影響を受けた土器群が出土している。これは、周囲に展開する他の住居址にも同様のことが言え、寒川町教育委員会調査の高田遺跡で確認された環濠集落の一部と考えられる。海老名市本郷遺跡、綾瀬市神崎遺跡などで明らかにされたように、相模川東岸域では弥生時代後期前半には三河・西遠江の強い影響下にムラが作られており、本遺跡の住居址群も同様の性格をもつものと考えられる。

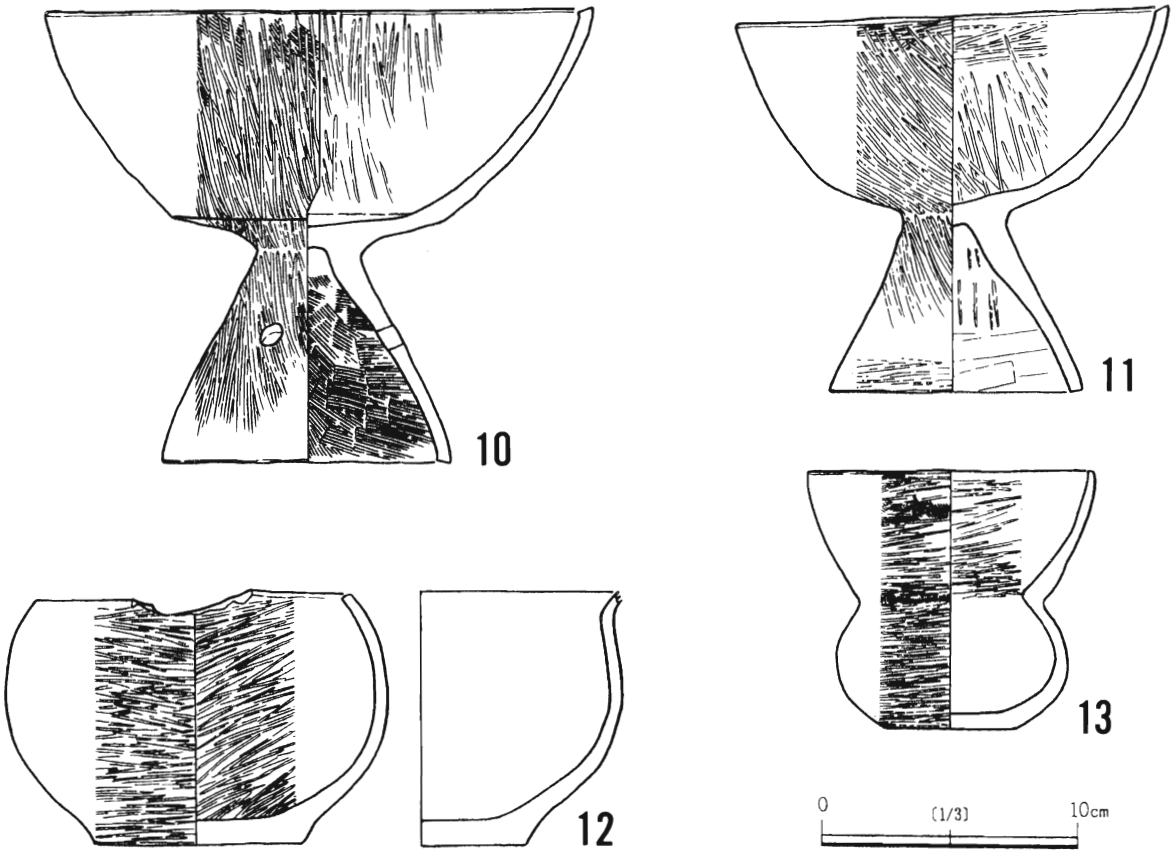
このように、本遺跡では弥生時代後期前半の集落に、後半になって方形周溝墓が築かれている。そして、双方ともに西遠江の影響が強い土器群を伴い、人的な交流をも想定させる。そして、東海西部地方においても、前後の山中様式、本屋敷様式（廻間Ⅱ式）に比べて極端に他地域への影響度が弱いと評価されてきた欠山様式が、こうした形



第4図　方形周溝墓出土土器（1）



第5図　方形周溝墓出土土器（2）



第6図　方形周溝墓出土土器（3）

で相模に影響を与えていることが判明したことは重要である。確かにこれまでも、世田谷区下山遺跡や横浜市三殿台遺跡、秦野市砂田台遺跡、厚木市及川寺ノ上遺跡等で欠山様式型の高坏が出土しており、その影響が皆無ではないことは知られていた。しかし、それらはいずれも単発的であり、中には古墳時代に下るものも含まれていることから、背後に組織的な地域間交流を想定することは難しい状況であった。特に相模では、前段階の山中様式の影響が強いこともあって、それが途切れることのほうに注目が集まってきた。弥生時代後期後半といえば、西遠江では欠山式の高坏に置き替わっているが、相模では伊場式（山中様式）系の高坏が広く分布する。交流が途絶えた結果、本国の形態変化から逸脱し、独自に変容したと評価される。しかし、本遺跡の資料により、限られた範囲かもしれないが、後期後半にいたっても継続的に交流が行われていたことが明らかとなった。しかも方形周溝墓の検出は、その母体となる集落の存在を約束している。後期の環濠集落の成立、解体過程を知る好材料となる可能性を秘め、周辺に眠るであろう集落の様相が注目される。

また、前出の神崎遺跡、寒川町大蔵東原遺跡、厚木市御屋敷添遺跡等、三河・西遠江の影響が強い遺跡が、後期後半まで継続しないのに対し、本遺跡のこうした状況は唯一の例外である海老名市本郷遺跡と類似し、本遺跡が他地域からの情報を集積させた拠点的な集落であった可能性を示唆している。

高田遺跡は、土器の時間的・空間的把握から、集落の在り方、当時の地域間交渉、社会情勢にまで踏み込める注目すべき遺跡であり、今後の更なる調査が期待される。　（立花　実）

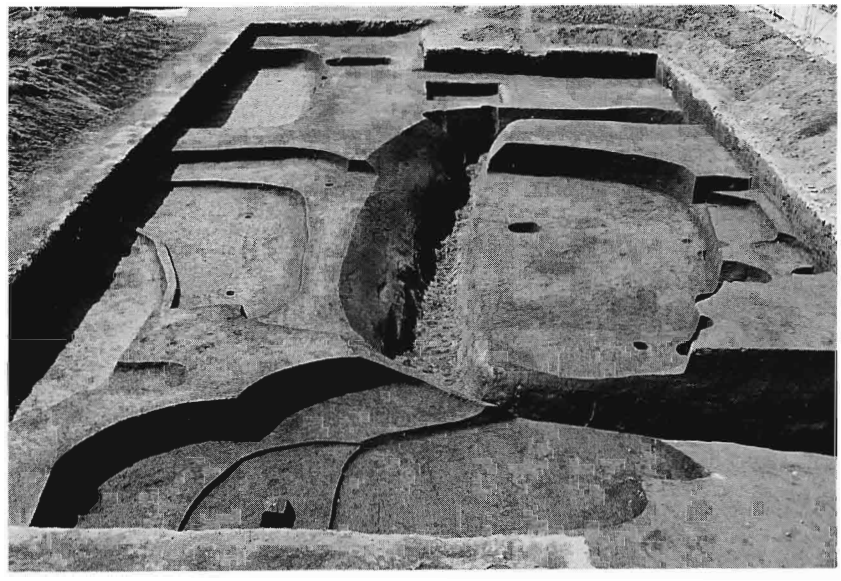


写真 1
発掘区（北側半分）

写真 2
方形周溝墓

写真 3
周溝内土器出土状態

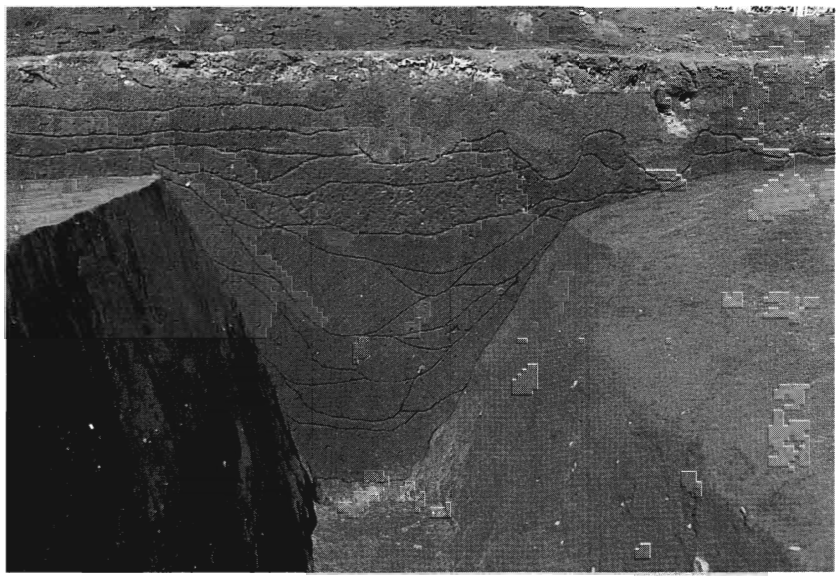


写真4
周溝覆土（北側）

写真5
周溝覆土（実測図A）

写真6
周溝覆土（実測図B）